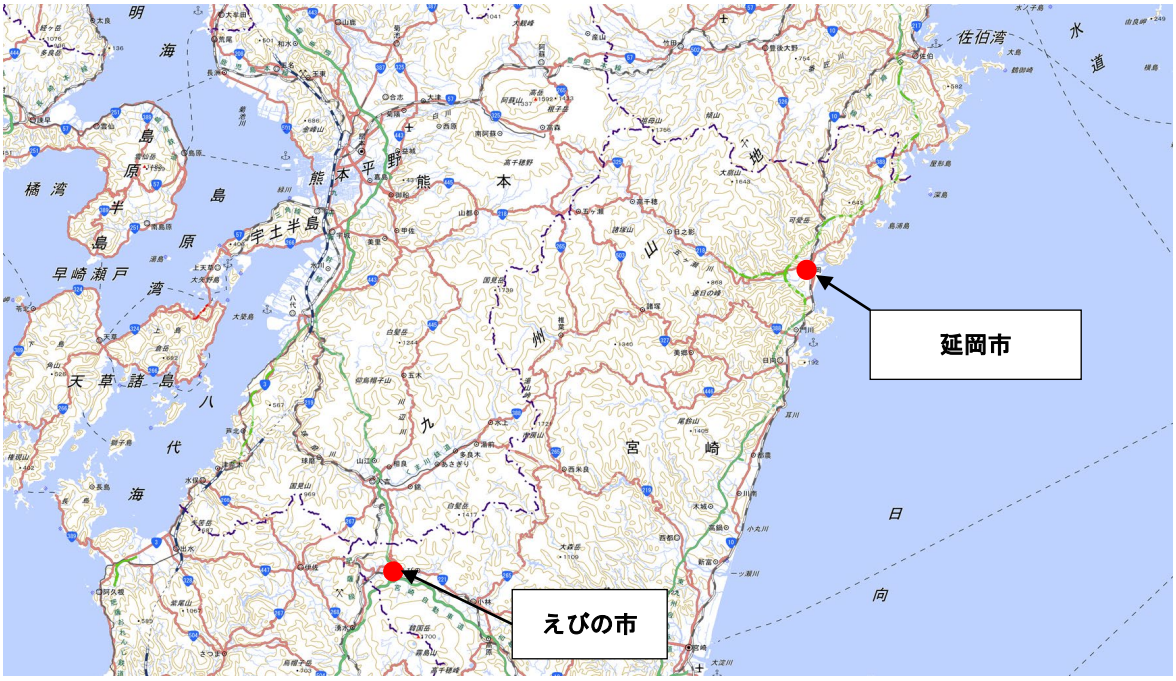
宮崎県（延岡市、えびの市）の現地調査概要

・五ヶ瀬川流域の４河川が合流する宮崎県延岡市では、過去に度重なる水害に襲われている。また、霧島山系の宮崎県えびの市では大規模な土石流が発生している。
・文献調査に基づき、過去の記録が残る地域において詳細情報を収集するため、宮崎県延岡市、えびの市で現地調査を実施した。

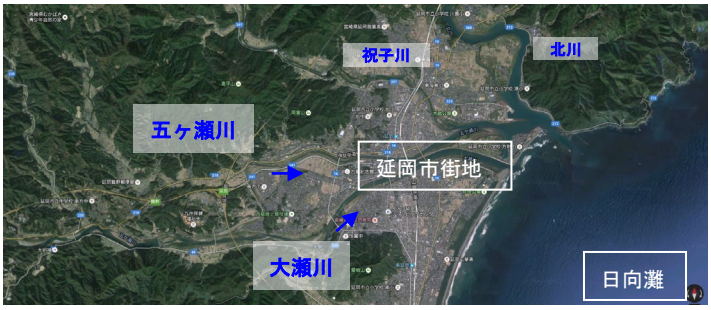
調査日：平成 28 年 2 月 24 日（水）～25 日（木）
調査地点：宮崎県延岡市、えびの市



▲調査箇所図　　出典：国土地理院

【延岡市の水害】

・宮崎県延岡市は五ヶ瀬川と大瀬川を中心に街並が形成された城下町であり、「水郷のべおか」といわれるように豊かな水と自然に恵まれている。
・延岡市は市街地を貫流する五ヶ瀬川、大瀬川と支流の祝子川、北川の四つの川が合流し日向灘へ流れ込むため、一たび水害が発生すると、その被害は甚大なものとなる。



▲延岡市の五ヶ瀬川流域地図　　出典：Google

・五ヶ瀬川流域の洪水は原因の多くが台風である。台風が接近すると日向灘の湿った空気

が一気に九州山地に吹き寄せて、急激に雲が発生し、豪雨をもたらすために洪水が頻繁に発生する。五ヶ瀬川流域に降った豪雨は一気に延岡市内に流れ込み、大きな被害が幾度も発生している。

▲平成 5 年 8 月 10 日安賀多橋（大瀬川 3K800_台風 7 号）

▲平成 5 年 8 月 10 日　小峰地区
（五ヶ瀬川 7K000_台風 7 号）

▲平成 5 年 8 月 10 日　東海町
（北川 0K600_台風 7 号）

▲平成 9 年 9 月 13 日～16 日
東海蛇（北川 0K200 左岸）

▲平成 9 年 9 月 13 日～16 日
二ツ島（台風 19 号）

▲平成 9 年 9 月 13 日～16 日
北川町家田（台風 19 号）

▲平成 9 年 9 月 13 日～16 日
北川町熊田橋（台風 19 号）

▲平成 17 年 9 月 4 日～7 日
岡富地区（五ヶ瀬川 3k000 左岸）

▲平成 17 年 9 月 4 日～7 日
小峰地区（五ヶ瀬川 6k900 左岸）

▲平成 17 年 9 月 4 日～7 日
川島地区（北川 3k000 左岸）

▲平成 17 年 9 月 4 日～7 日
北小路地区（五ヶ瀬川 3k400 左岸）

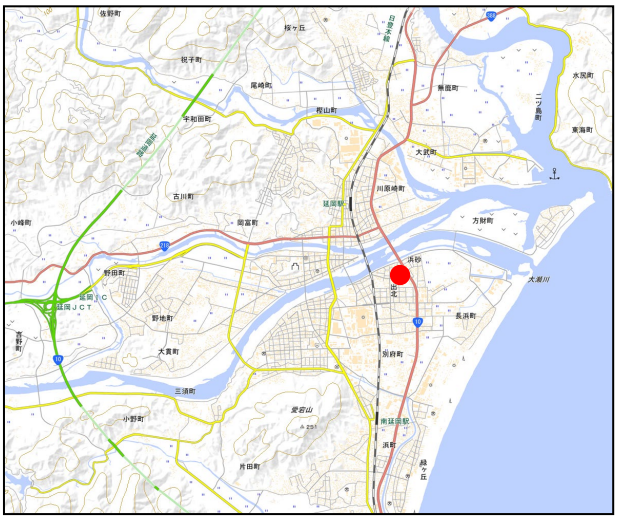
出典：国土交通省　九州地方整備局　河川部

【安政５年洪水の供養塔が残る：延岡市浜砂町　永源寺】

・延岡市の中心部に位置する永源寺には安政５年洪水の供養塔が残っている。

・供養塔の正面には「万霊供養塔、文久元年七月七日」、向って左には「安政五年七月に大洪水が発生して永源寺境内の半分が流出した。有縁無縁の全ての霊の供養のため、村中を喪主としてこの塔を建てた」という文字が刻まれている。

・供養塔の高さは 1,960㎜、台石は 220㎜。昔の永源寺は、日豊本線の川の中にあったが現在の地に移動したという話もあり、現在も寺はかさ上げされている。



▲永源寺位置（延岡市浜砂町）

▲永源寺（現在もかさ上げされている）

▲入り口正面に見えるのが供養塔

▲永源寺の供養塔

▲供養塔の左側面に由来の文字が刻まれている

【三福寺の「ぬれ仏」：延岡市北町　三福寺】

▲三福寺位置（延岡市北町）

・延岡郷土年代表には「明治十三年月不詳大洪水があった。五箇瀬川二丈一尺（六・四米）。大瀬川二丈三尺（七米）の増水」とあるが、その一端が妙専寺、光勝寺に記録されている。

・妙専寺の年代記には、「八月四日夜ヨリ出水、本堂下陣浸水。三須三輪岡富大貫田畑大損。川原町柳下大クズレ　御掘口下水通ゼズ各橋皆流死者四十人余　高千穂山陰所々山崩ル」とあり、光勝寺の過去帳をみると明治十三年に、「釈尼妙貞七月一日新町白石善三郎妻サダ釈尼妙蓮七月一日　白石善三郎（豊前屋）抱人イト事右二人善三郎ト共ニ大洪水ノ為居家流失一本橋（橋名）吉平ノ竹藪ニ掛リ善三郎ノミ竹枝ニ取着夜明ヲ待チ一命ヲ助ルヲ得タリ　而してニ婦人ハ其ノ少下ニ死体ヲ発見セリ」と記録されている。

・この洪水で大瀬橋、坂田橋を始め、小橋も流失した。妙専寺下陣の高さから考えると現川中地区全戸が浸水している。当時、岡富村に属していた新町の川原から下手一帯が浸水し、この辺は一変したといわれる。

・延岡市北町の三福寺、本堂左手前にある阿弥陀如来坐像は「ぬれ（濡）仏」と呼ばれる。

・当初は新町の河川敷あたり（江戸時代の処刑場、現在の延岡商工会議所付近）にあったが、明治 13 年大洪水後の翌年、境内に移設された。

・名称については定かではないが、この付近はかつて洪水被害が多く、この名称が付いた可能性がある。（参考文献：西村祝一 1966『郷土物語　火と水との戦い』延岡春秋社）

▲三福寺

▲本堂の右手前に「ぬれ仏」が安置されている

【江戸時代の水害史】

『・石川恒太郎編“五ヶ瀬水系の水害史”より

◎有馬氏時代、慶長十九年＝元禄五年（西一六一四＝一六九二）の記録「国乗遺聞」によると、洪水の状況を次のように書いてある。

「県地（あがた）形高千穂肥後境まで十五、六里はあり、又、祝子川祝子村迄六里、又、八戸川（今の北川）本流豊後境まで八里右三河の奥山大雨降りぬれば三ヶ所の大川満水にて港口一ヶ所に落合ける。港口の幅五・六町の処水を吐ききらずして溢れる水は浜の山南、毛なし浜と云処を打越ゆる。御城内より恒富、岡富、粟之名、浦々水たたゆる処第一なり」

・これは、有馬氏が延岡城主であった時のことを書きとめた書物であり、延岡にはなく有馬氏が転封して行った福井県丸岡町に残っている。

◎牧野氏時代の記録（牧野家史による）

・享保六年（西一七二一）七月三日より延岡大風雨に満水御損毛御届八月十五日差出、高一万九千六百六十八石八斗余

・享保七年六月二十二日、延岡雨降続、二十三日、二十四日満水にて御損毛御届、高三万六千五百二十四石六斗余

・同九年八月十四日より延岡大風雨、十六日満水に付御損毛御届、九月二十一日御差出、高一万六千七百七十石余

・同十年十二月御領分御損毛御届御差出、高二万二千五百七十六石余

・これは、水害による被害高を幕府に届け出たものである。享保六年から同十年までの五ヶ年間に蒙った水害の損毛高は九万五千五百三十九石四斗余りとなる。この五ヶ年間に享保八年を除いて毎年水害を蒙っている。

・この五ヶ年間の水害による損毛高は、東西臼杵群と宮崎群との二ヶ年間の生産高に当る。

◎内藤氏時代、延享四年～明治四年（西一七四七－一八七一）

・内藤氏が岩城平より延岡に来るや先ず洪水に対し左の如き規定をなした（旧記書抜）

・寛延元年（西一七四八）八月十日

・洪水之節手当左之通り

・一、船通路留出番難到節は両御番所共代り之物出勤迄は詰切被仰付候、但詰切御賄可被下候

・一、満水に而面々居住に家族共難差置節は最寄之水付無之所へ乍計前広に可引取候、但本小路桜小路辺は御本城へ可引取候、尤於御門出役之御目付並に御徒目付へ相届御本城へ可被通候

・一、退後候有之時之ため兼而助船被仰付置候右助船之儀は御船手より御城内へ桜橋迄三艘、北小路へは元町より三艘、新小路へは柳沢町より三艘差出候筈に候間一退後の面々も有之候はば乗船引退可申候尤船御詰後此度被仰付置候

・右之趣被仰出候間支配有之面々は其支配方へも可被相達候
・さらに宝暦元年（西一七五一）七月二十四日に下記の達示をしている。
・一、洪水の節御家中末々迄居宅退罷越候はば宿到候様兼而左の寺地へ申遣置候様町奉行へ以手紙申遣す
・北小路、浄菩提院、台雲寺、善正寺、祇園寺、新小路、光福寺、春日寺、光明寺』
（引用文献：西村祝一 1966『郷土物語　火と水との戦い』延岡春秋社）

【享保 6 年 7 月大雨の概要】

・享保 6 年 7 月大雨は、7 月 26 日～31 日に渡り、多数の建物被害を及ぼし、宮崎県での死者は多数、長崎県でも死者は 46 名にのぼったとされている。

【流れ灌頂（かんじょう）：延岡市】

・流れ灌頂は、毎年 8 月 18 日に延岡市仏教会が主催となり、「水郷」と称される延岡市に江戸時代から伝わる夏の風物詩である。
・もともとは、水害や水難事故の犠牲者の霊を供養するために始まったとされている。川面を照らしながら流れていく灯篭の姿は幻想的で、訪れた人たちはゆっくり流れていく灯篭に手を合わせながら故人の冥福を祈り、先祖の霊を見送る。

▲「流れ灌頂」の川面を照らしながら流れていく灯篭
出典：延岡観光協会 HP

▲延岡市東本小路（延岡市役所河川敷駐車場）

【河川沿いの水神さん：延岡市】

・延岡市内の河川沿いには、多くの「水神さん」が祀られている。水難や水害の安全を祈願する住民の祈りから生まれた神様が「水神さん」。

・祠がある場所は、かつて水害が起こったところであり、人々の川と共に生きていくという敬虔な思いが感じられる。

▲水神さんの撮影位置（延岡市五ヶ瀬川沿い）

【五ヶ瀬川水系の水神さんマップ：延岡河川事務所】

・国土交通省九州地方整備局　延岡河川事務所においては、平成８年度に五ヶ瀬川、大瀬川、北川及び祝子川等の河川沿いに祀られている水神様を 98 箇所調査し、「五ヶ瀬川水系の水神さんマップ」としてまとめ、Ｗｅｂサイトで公開している。

出典：延岡河川国道事務所 HP

【先人の治水対策の知恵「五ヶ瀬川畳堤」：延岡市紺屋町】

▲畳堤の位置（延岡市紺屋町１丁目）

・延岡市の五ヶ瀬川沿いには、全国でも珍しい「畳堤」という特殊堤が 980m残っている。
・「畳堤」とは大正から昭和の初期にかけて造られた高さ60ｃｍのコンクリート製の堤防であり、上から見ると幅７ｃｍの隙間がある。
・畳堤の枠は、この地方の民家の畳がちょうど入るサイズで周辺の民家から住民が自ら持ち寄り、この隙間に畳をはめ込んで水を防いでいたという。
・畳堤は、長良川、揖保川と五ヶ瀬川にのみ現存する構造物であり、特に「五ヶ瀬川に現存する畳堤は、大正末期から昭和初期に設置された我が国最古のもの」（大正末期から昭和初期※昭和９年まで確認済み）とされている。
・また、五ヶ瀬川の畳堤を守る会による保全活動や防災意識の啓発普及活動も評価されており、平成 27 年９月に土木遺産に認定された。

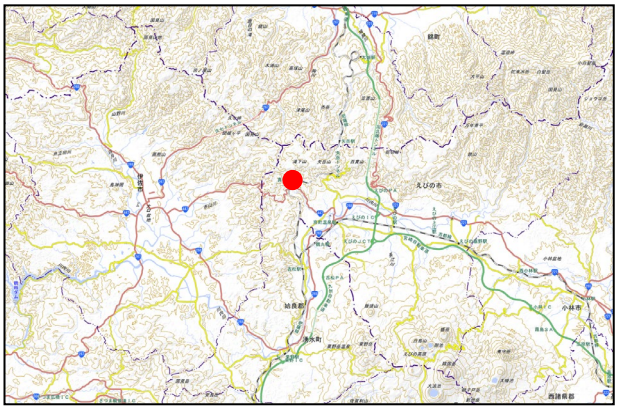
▲現在の畳堤の状況（ホテルメリージュ前から上流を望む）

▲畳堤の説明板

▲畳堤竣工時の状況

出典：延岡河川国道事務所 HP

【スイッチバック線ホームに残る山津波記念石：えびの市真幸字内堅】



▲山津波記念石の位置
（えびの市真幸字内堅　ＪＲ肥薩線真幸駅）

・昭和 47 年（1972 年）７月３日より、梅雨前線を伴った低気圧に暖湿気流が流れ込み、九州と四国で局地的な大雨が降った。（雨は 15 日まで続いたとされている）
・霧島山周辺も集中豪雨に見舞われ、総降水量は500mm以上を観測した。さらに、えびの市の熊本県境付近では総降水量が 600mm以上に達した。
・７月６日、えびの市のＪＲ肥薩線真幸駅の裏山が、８合目付近(海抜 500～600m)で地すべり性崩壊を起こし、山津波が発生。
・山津波は６日の 14 時 15 分から５回発生し、高さ 350m、幅 280mに渡り、山地が崩壊した。30 万㎥ に及ぶ土砂が、ＪＲ肥薩線を切断して白川沿いに 1.5ｋｍ流出した。この災害で住家 28 戸、非住家 29 戸が流失し、４名が亡くなった。
・しかし、ほかの地区住民は昭和 40 年（1965 年）の土石流の教訓を踏まえ、発生直前に避難して難を逃れたという。
・山腹の崩壊が起こる直前に杉・檜林の異常な揺れに気づいた集落の古老が「山津波が来る」と言って、集落の人々をいち早く高台に避難させたからであるとも言われている。

▲倒壊・流失した家屋の状況

▲崩壊地と流出土砂

出典：宮崎県 HP（えびの市所蔵）

・ＪＲ肥薩線真幸駅のホームにある「山津波記念石」は、昭和 47 年７月の被災後、当時の真幸駅長がスイッチバック線ホームに取り残されていた推定重量約８トンの岩石を「災害記念」として説明板を設置したものである。記念石は、過去の災害を伝える貴重な“災害文化財”となっている。

▲真幸駅ホーム中央から山津波記念石を望む

▲山津波で流れ出た約８トンの岩石がホームに

【説明板の掲載文】
山津波記念石
昭和 47 年７月６日午後１時 45 分頃山津波が発生、約 30 万立方メートルの土砂が流出した。
この岩塊は当時の山津波で流れ出たものを現地でそのまま山津波記念石として保存するものである。尚、この岩塊は重さ約８トンである。　　昭和 47 年 8 月 真幸駅長
宮崎県小林土木事務所、えびの市土木課

（参考文献：えびの市郷土史編纂委員会 1994, 宮崎県における災害文化の伝承（宮崎県土木部）

【昭和 47 年 7 月豪雨の概要】

・梅雨前線の活動により 5 日未明から降り始めた雨は、6 日未明より午後にかけて局地的大雨となり、緑川ダム上流域で 300㎜ 程度、御船川及び緑川中流域で 400～500㎜、加勢川及び緑川下流域で 350～400㎜ の連続雨量となりました。緑川では中甲橋地点の最高水位が 4.2m、また城南地点の最高水位が 6.55m に達し、いずれも既往最高水位を記録しました。緑川水系では死者・行方不明者 3 名、家屋の全半壊 94 戸、床上浸水 3,081 戸、床下浸水 6,902 戸の被害が発生しました。（緑川水系河川整備計画より）

▼昭和 47 年 7 月豪雨による遠賀川水系の被災状況

死者	1 名
家屋全壊	7 戸
流失戸数	1,614 戸
家屋浸水	4,212 戸

出典：遠賀川水系河川整備計画（平成 19 年 4 月）［国土交通省 九州地方整備局 遠賀川河川事務所］

▼昭和 47 年 7 月豪雨による嘉瀬川水系の被災状況

浸水家屋	8,500 戸

出典：嘉瀬川水系河川整備計画（平成 19 年 10 月）［国土交通省 九州地方整備局 武雄河川事務所］

▼昭和 47 年 7 月豪雨による緑川水系の被災状況

死者	3 名
家屋全半壊	94 戸
床上浸水	3,081 戸

出典：緑川水系河川整備計画（平成 25 年 1 月）［国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所］

1．2治水の沿革

（1）水害の歴史

遠賀川の明治以前の資料に残る一番古い洪水は元和（げんな） 6 年（1620 年）「遠賀川洪水（水巻町）」とあります。さらに、元和 6 年から明治 22 年（1889 年）に至る 270 年間に約 70 回の洪水記録があります。明治以降についても度々洪水が発生し、特に明治 22 年 7 月、明治 38 年 7 月、昭和 10 年 6 月、昭和 16 年 6 月と大洪水が頻発しました。そして、昭和 28 年 6 月には、流域内の死傷者 231 人（死者 20 人）、浸水家屋数 38,791 戸に達する未曾有と称される大水害が発生しました。主な洪水は下表に示すとおりです。

表1.2.1　　遠賀川の主な洪水と洪水被害

発生年月日（西暦）	原因	日の出橋水位（m）	被害状況
明治22年7月4日～5日（1889）	梅雨	－	死者11名、家屋流出倒壊127戸、浸水家屋2069戸、堤防決壊2286箇所、橋梁破壊412橋
明治33年7月6日～11日（1900）	梅雨	－	死者1人、家屋倒壊8戸、浸水家屋780戸、堤防決壊55ケ所、橋梁破壊26ケ所（田川郡の被害のみ）
明治37年6月24日～25日（1904）	梅雨	－	死者1人、家屋倒壊2戸、家屋埋没1戸、床上浸水550戸、床下浸水650戸、田畑冠水47町歩
明治38年7月25日～26日（1905）	梅雨	6.51	死者12人、家屋流失倒壊163戸、浸水家屋21,000戸以上、堤防決潰257ケ所、橋梁流出141橋
昭和10年6月23日～24日（1935）	梅雨	5.60	床上浸水455戸、床下浸水947戸、堤防決潰１ケ所、橋梁流出6橋
昭和16年6月25日～29日（1941）	梅雨	5.65	堤防、道路、橋梁、家屋、耕地、炭鉱等の被害が続出
昭和28年6月25日～30日（1953）	梅雨	欠測	死者20人、負傷者211人、家屋流出・全半壊953戸、浸水家屋38791戸、田畑流出埋没1261町歩、田畑冠水13116町歩
昭和47年7月13日～14日（1972）	梅雨	6.45	死者1名、負傷者7名、家屋全壊7戸、家屋半壊27戸、家屋流失1614戸、家屋浸水4212戸
昭和54年6月10日～13日（1979）	梅雨	7.40	死者1名、負傷者8名、家屋全壊7戸、家屋半壊94戸、床上浸水1901戸、床下浸水4262戸、田畑冠水4138ha
昭和55年7月7日～12日（1980）	台風26号	6.23	死者1名、家屋半壊7戸、家屋流失1戸、床上浸水21戸、床下浸水949戸、田畑冠水790ha
昭和55年8月28日～30日（1980）	前線	7.35	死者4名、負傷者2名、家屋全壊15戸、家屋半壊4戸、床上浸水331戸、床下浸水1916戸、田畑冠水662ha
昭和60年6月25日～26日（1985）	梅雨	7.20	死者1名、負傷者1名、家屋全壊3戸、家屋半壊39戸、床上浸水83戸、床下浸水578戸、田畑冠水1143ha
平成11年6月29日（1999）	梅雨	6.72	床上浸水232戸、床下浸水930戸、田畑冠水752ha
平成13年6月19日～20日（2001）	梅雨	7.84	床上浸水87戸、床下浸水151戸
平成15年7月19日（2003）	梅雨	8.07	負傷者2名、家屋全壊7戸、家屋半壊9戸、床上浸水1957戸、床下浸水1778戸

出典：遠賀水系河川整備計画（平成 19 年 4 月）［国土交通省 九州地方整備局 遠賀川河川事務所］

1.2 治水の沿革

1.2.1 洪水の概要

嘉瀬川の洪水は 6 月から 7 月にかけての梅雨前線によるものが多く、過去の大規模洪水のほとんどが梅雨期に発生しています。

戦後において、昭和 24 年 8 月、昭和 28 年 6 月など本川・支川で何度か堤防が決壊し水害を被っています。戦後において、嘉瀬川流域に多大な被害を及ぼした主要な洪水は表 1-2-1 に示す洪水があります。

特に昭和 24 年 8 月洪水は床上・床下浸水 25,552 戸、家屋の流失・全半壊 654 戸の壊滅的な被害をもたらしました。

表 1-2-1　　主要な既往洪水一覧表

洪水発生年		原 因	流 量 (官人橋地点)	被害状況
昭和 24 年 8 月	1949 年	台風	約 3,400m^3/s	嘉瀬川の抜本的な改修の契機となった洪水 家屋全半壊 543 戸，家屋流失 111 戸 床上浸水 11,559 戸，床下浸水 13,993 戸
昭和 28 年 6 月	1953 年	梅雨前線	約 2,600m^3/s	床上・床下浸水 31,032 戸 家屋の流失・全半壊 175 戸
昭和 29 年 9 月	1954 年	台風	約 900m^3/s	床上・床下浸水 3,045 戸 家屋の流失・全半壊 2 戸
昭和 30 年 4 月	1955 年	低気圧	約 1,000m^3/s	床上・床下浸水 2,648 戸
昭和 38 年 6 月	1963 年	梅雨前線	約 2,200m^3/s	床上・床下浸水 1,274 戸 家屋の流失・全半壊 115 戸
昭和 42 年 7 月	1967 年	梅雨前線	約 1,200m^3/s	床下浸水 402 戸
昭和 47 年 7 月	1972 年	梅雨前線	約 1,600m^3/s	浸水家屋 8,500 戸
平成 2 年 7 月	1990 年	梅雨前線	約 1,100m^3/s	床上浸水 1,783 戸 床下浸水 12,327 戸

注 1：佐賀県災異誌（第 1 巻～4 巻）より流域内市町村の値を抽出
注 2：昭和 47 年以前の流量は雨量からの推算値
注 3：昭和 48 年以降の官人橋地点流量については北山ダムが貯留しなかった場合の推算流量

出典：嘉瀬川水系河川整備計画（平成 19 年 10 月）［国土交通省 九州地方整備局 筑後川河川事務所］

（3）昭和 47 年 7 月洪水の概要

梅雨前線の活動により 5 日未明から降り始めた雨は、6 日未明より午後にかけて局地的大雨となり、緑川ダム上流域で 300mm 程度、御船川及び緑川中流域で 400～500mm、加勢川及び緑川下流域で 350～400mm の連続雨量となりました。緑川では中甲橋地点の最高水位が 4.2m、また城南地点の最高水位が 6.55m に達し、いずれも既往最高水位を記録しました。

緑川水系では死者・行方不明者３名、家屋の全半壊 94 戸、床上浸水 3,081 戸、床下浸水 6,902 戸の被害が発生しました。

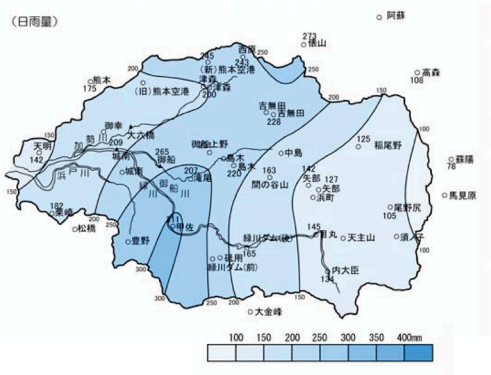
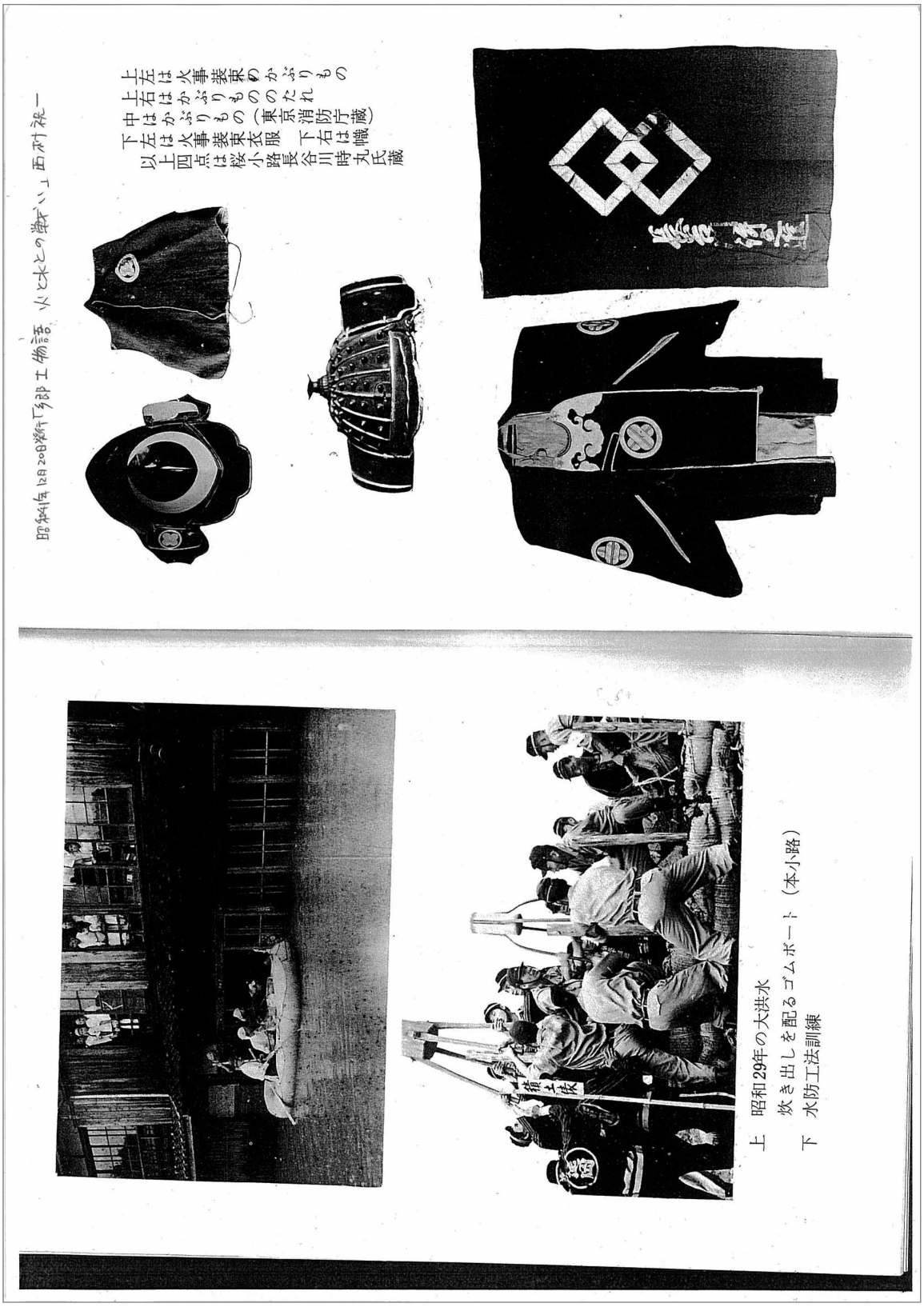


図 1.2.5　緑川流域の等雨量線図
（S47 年 7 月洪水、日雨量）

写真 1.2.8　昭和 47 年 7 月洪水時の状況

出典：緑川水系河川整備計画（平成 25 年 1 月）[国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所]

＜参考文献＞「郷土物語　火と水との戦い」西村祝一（Ｓ41.12.20）延岡市図書館蔵



地震と津波と竜巻

延岡で一番古い地震の記録

鳴動とともに大地は裂け、火を噴き、山の如き津波が打寄せ、一瞬にして数千数万の人命を呑み、この世の最後を思わせる地震!!しかも予告もなければ待ったなしの地震は昔から恐ろしいものの第一に数えられている。

桜島の大爆発、関東大震災、三陸沖大津波、福井地震、新潟地震、松代地震と忘れたころにやってくる。それにしても、人生六七十年の僅かな経験では他界の出来事としか考えられない。〃国民防災の日〃と定められた九月一日も若い人にはピンとこないのも無理はない。

わが国で一番古い地震は、日本書紀にでてくる允恭天皇五年（西四一六）の地震。九州では天武天皇六年（西六七九）の地震。一番大きいのは宝永四年（西一七〇七）の地震。宮崎県では寛文二年（西一六六二）の外所（とんどころ）地震といわれる。

〃知らぬが仏〃と安閑としている私達の住む郷土に、こんな地震や津波があったかと記録をみるだに驚くのである

千光寺由緒にある地震洪水の記録

延岡で一番古い記録は、延岡市祝子町千光寺に被害記録がある仁和三年（西八八七）七

月の地震で、これは宝永四年の地震津波に優るとも劣らぬ大きなものであった。理科年表によると、「七月三十日、東経百三十八・三度、北緯三十六度、京都及五畿七道、庁舎転倒し津波あり死傷多し。M（マグニチュード）八、六」とある。この地震で川島の熊野大権現も倒壊している。

日州臼杵郡祝子村千光寺由緒

一当寺開闢人王四拾五代聖武天皇神亀元年甲子年行基菩薩巡国之砌当所御滞在ニ而聖観音並ニ脇立不動尊毘沙門天三尊を彫刻被成其節当所之領主松田肥前守精舎壱宇御建立被成右之三尊奉安置護国山慈蓮寺と号ス田畑山林御寄附之由依之当寺開基春光院殿松翁相伝大居士と法名古墳石塔寺内ニ御座候其後仁和三年七月大地震洪水ニ而寺地田砌大半川原ニ被成候然してより年々水災難後因茲同村之内夏田ト申所江引移候然所法王派ノ長老士徹と申僧在住之節大士之霊夢により今旧跡ニ選来り候其以後当寺観音江時疫退散之御祈誓御座候処祈願円成被成此故哉則大殿広堂御造営運慶作之弥陀善逝を本尊と被成将又広堂ニ者右之三尊奉安置候其節円通山千光改号有之候蓋禅宗士徹以前法相宗三論之僧徒歴住之ニ相見申候誠ニ往古者延岡川北随一之勝藍与申伝候得共只今ハ一堂一坊ニ而境内九畝弐歩御年貢地と被成山林斗旧規之通代々之御領主御陰ニ而御座候且又慶長拾九年以来延岡台雲寺末寺と被成候（以下略）

延享四卯九月日　祝子村　千光寺印

寺社御奉行

清水五郎太工門殿

今泉郷左衛門殿

右延享年中書上有之候写之外由緒等無御座候以上

享和二戌正月　祝子村　千光寺

妙町佐藤栄三郎（明治30年生）さんの話

『二、三十年前のこと、現在の千光寺の向い柚木側の川の中から、春日（神社）さんにあるような大楠の株の埋木を苦心しながら機械で巻き揚げたことがある。』といっているが、地震洪水の被害をうけた大昔の千光寺はその付近にあったのではないかといわれている。

別府湾内瓜生島の海没と「地震加藤」地震

〃災害は忘れたころにやって来る〃といわれるが、ここに掲げる別府湾内瓜生島の海没地震と「地震加藤」地震は、その間わずか七時間で、わが国にこんな大地震が引続きに見舞って来たのである。

国民百科事典によると「文禄五年（西一五九六）閏七月十二日、豊後薩摩津波あり、別府湾内瓜生島が海中に没す死者七〇八」とある。別府湾大分市海岸から五六百米のところに周囲三里（十二キロ）というから、丁度、延岡市島野浦島ぐらいの瓜生島（略図参照）があって陥没し、さらに、その一年後の七月二十九日には瓜生島の西にあった久光島も海没した。

武者金吉編日本及隣接地域大地震年表によると『豊後、七月三日即ち一ケ月以上前より多く地震を発し、特に閏七月十一日未刻（14時）より十二日申刻（16時）に至るまで大小無数の地震が起ったが、夕刻に至り大地震起り、高崎山其他崩れ八幡村祚原八幡社拝殿其他倒潰す。ついで海上に一大音響起り、海水遠く引去りし後、大津波寄来り、別府湾沿岸は甚大なる損害を蒙った。大分及び付近の邑里は悉く流没し、独り同慈寺の楽師堂のみ巍然として残存したと云う。佐賀関では崖岸崩れ、家屋倒潰し、田畑塩田の流没六十余町歩に及んだ。別府湾の全沿岸が惨害を被ったことと察せられるが、其他の被害は明かでない。なほ津浪は臼杵其他にも損害を与えたようである。この地震に関し特筆する事件は瓜生島の陥没である。瓜生島は別府湾内大分市海岸より五六町の

（故今村博士原図）

距離にあり、東西約一里、南北約二十町、周囲三里余の島であったが、この時島の八〇%は陥没し、七百八人の死者を生じた。』とある。

一方、「地震加藤」の地震は瓜生島陥没地震より七時間後の閏七月十三日子の刻におこった。秀吉の居城である伏見城の天守閣や諸所の門などが倒潰（城中にて上臈七三、中居下女五〇〇死、堺にて死六〇〇）、謹慎中の加藤清正は主君の安否を気遣い、部下三百人に鉄挺など持たせて急遽一番乗りの登城、警固に当り、遅れて登城する部将たちを見返す一幕は歌舞伎や歌劇、講談などで余りにも有名である。

瓜生島、久光島の海没津波は延岡地方に影響があったか不明であるが、薩摩の文字も見えるので記したものである

外所（とんどころ）地震、津波

理科年表によると、「寛文二年（西一六六二）九月二十日。日向、大隅。潰家三八〇〇、死傷多し津波あり。日向南岸沖」とある。

この地震は、宮崎県（日向国）地方では有史以来最大の地震といわれるもので、日本史年表には「西日本大地震」とある。被害地の最も甚大なのは宮崎市大淀川河口北部から、ビロー樹繁茂する観光地青島の近くまで周囲七里三十五町（約三〇キロ）が陥没し、大淀川河口にあった福島村など七ケ村が全滅。現在宮崎市下水流に鎮座の小戸（おど）神社は当時大淀河口に当る下別府村に鎮座され社地社殿共に海没加江田村の加江田神社も海没、下別府番所（しもんびゅばんしょ）等も同様海没した。この地震資料は白瀬永年の「延陵世鑑」や妙専寺の「年代記」をはじめ沢山あり。安井豊、田辺剛両先生は験震時報別冊「日向灘の外所地震津波調査について」にこれを纒めている。

（延陵世鑑）寛文二年九月、日向国中大地震あり。中にも宮崎、那珂二郡最も甚しく、山崩れ、谷崩れ、民屋の破損は数知らず、海辺の田畑海となること凡そ七、八千石に余れり、常に潮の満に岩の頭を出したる所、地震後は岩頭三四尺海底にあり。是を以て見れば地の陥ること三四尺余なるべし。前代未聞の大地震也。

（妙専寺年代記）寛文二壬寅九月日向一国大地震。別シテ宮崎山崩、民家破損数不知、海辺田畠海トナル凡七、八千石、地三、四尺ホト陥ル

（佐土原地震集記）伊東領内本郷の一在所、田地九千石採り沈め海となる。其村々の人家屋敷、屋敷の囲ひ、竹木までゆり沈め、木も竹も柱も海中より立てり。以下略

（日向纂記）寛文二年九月十九日の子の刻日向国地大に震し、且つ津波俄に来りて那珂郡の内下加江田本郷所々の地陥って海となること周囲七里三十五町、田畑八千五百余、米粟二千三百五十石余流失あり、潰家千二百十三戸の内陥って海に入るもの二百四十六戸、其人員二千三百九十八口の内溺死十五人、牛馬五頭に及べり。飫肥の城にも石垣九ケ所百九十二間破壊し、城隍二ケ所埋り外諸士屋敷、土蔵石垣等の破損勝って数ふるに遑あらず誠に古今未曽有の大災あり。

（大日本地震史料三巻殿中日記）島津但馬守領内、日向国佐土原、九月十九日夜子刻、夥敷地震破損之由注進之、土蔵一、長屋三十軒、二之曲輪冠木上より崩落る、地三尺われ申、田畠少破亡地有之、山崩、当時人馬通い無之所御座候、侍寺町屋在々百姓等家都合八百軒崩、人牛馬死過仕る者数多有之、同二十日にも四十度地震、破損は無之由注進之、

有馬左衛門佐領知日向県城中甚地震、石垣崩、並町屋等夥敷破損、委曲重而注進可申由是又去月十九日子刻也。以下略

（大日本地震史料三巻玉露叢）九月に大隅国大地震、海陸地と成る。

九月十九日子の刻、有馬左衛門佐領内に於て地震に付、諸損色々之覚、居城三の曲輪の橋脇之石垣、高さ水底より四間半破損の所五間崩れ申し候、田畑五十七町余、在々所々潮入崩れ捨り地、宮崎下別府の湊にて破損船十艘、此荷物米七千二百五十俵之内、大小麦二百二十俵余、米は五千五百俵余ぬれ申候、破損の堤十三ケ所、間数六百七十間余なり。井手溝三ケ所、間数百四十間余破損。道橋崩て当時通路難成所々御座候事、頽家千三百軒余、並倒れかかり家五

百十軒、死者五人（筆者注…続皇代略記では五の下に百を脱記したようだといっている。）右之外御預り所本座破損之覚、田畑所々山岸破損之地御座候事、御米二百六十俵余並舟に積之宮崎下別府において高潮満て地震に沈之濡申米也、額家九十軒余、倒れかかりたる家百二十軒余御座候

以上の外、続皇代略記、青島神社々伝等々資料多し。肥前平戸の人、橘三喜の〃一宮巡詣記によると、延宝三年（西一六七五）日向廻国のおり三田井高千穂から延岡、土々呂を通り都農の日向一宮に参詣したが、九月十七日の記に

「……熊野原を行き過ぎ、たさしと云う所を通りけるに入り海広く見えけり。近きころ迄、とんところと云う村ありけれども、大地震津波来りて今は入江に成りたると聞き

『初塩にとんところびて家もなし』、左のかた 海ごしに吾田山后原（アダヤマキサキバル）とて木花開耶姫の生給ひし所見ゆ……」と洒落れている。

× ×

宮崎市青島街道の木花町島山に外所地震の碑が六基ある板塀の囲いの中、十平米ばかりの土地があり、五十年毎に建てたといわれる供養碑、右から二基は穂石が折れたり欠げたりして破損が甚だしいが一番左の一基は宮崎市長が三百年忌を営んで建てたもので、高さ一、三五五米（石〇、六七米、巾〇、二四七米）、正面には

外所地震供養碑
三百年忌

と刻んであり、右側には「昭和三十二年九月十九日建之、宮崎市長有馬美利」とあり、左側には「寛文二年九月十九日ノ地震デ外所村海中ニ陥没シ人畜多数罹災シタ以来五十年毎ニ碑ヲ建テテ供養シテ来タガ本年三百年忌ニ相当スルノデ将来ノ無災安泰ヲ併セテ祈念シナオコレヲ後世ニ伝エルタメココニ供養碑ヲ建立スル」とある。

宮崎市島山にある外所地震の碑

外所は海中に没してしまった地名であるが、同地方に外所姓を名乗る家が数軒あると聞く。

※〃震源地は日向灘〃とよく耳にする。日向灘には環太平洋地震帯の一部に当る地震の巣がある。北緯三十二度、東経百三十二度、つまり、日豊本線佐土原駅から真東に延ばした線と九州最東端から南に下った線の交る付近がそれで、日本有数の地震地帯といわれます。三十二度と百三十二度、双方共三十二度だから覚えやすい。この地点を覚えておくと、台風襲来の時も台風の位置がわかって役にたちます。

宝永四年の地震と津波

宝永四年（西一七〇七）といえば富士山六合目付近に宝永山を噴出した爆発地震かと思って調べると全く別のものであることがわかった。

理科年表には、「宝永四年十月四日東海道畿内南海道及び東山西海両道の一部。潰家死傷夥し、潰家二九〇〇〇、死者四九〇〇。九州の南東岸より伊豆まで津浪を受く。土佐にて其の高さ二〇米余。土佐西南部処々陥没、東南部隆起（東海道及南海道沖）M八、四」とある。関東大震災がM七、九であるから本邦地震最大級のもの。

（宮崎県災異誌）未刻地震その後止まず丑刻大震、近畿南海道、東海道、山崩れ、谷埋まり地裂く。沿岸津浪起る。紀伊土佐人多く死す。大阪殊に甚し。ために死する者三万余人。前代未聞也（皇年代略記）

〔日本震災凶筮録〕日向国（竹村太郎右衛門代宮所＝天領代宮）堤防破損一二〇〇間。潰家四一〇軒。流失一〇軒。

破損三三五軒。死者一人。損牛一頭。損馬一頭。その他田畑汐入あれ共未だ調査及ばず。総計田畑汐入泥入共五七〇〇石余。田畑荒地二四〇町一反。堤防破損六九五八八間余石垣流失三五〇間。同破損三四九間。潰家一三四一八軒。流失一五二五軒。破損一六二四九軒。死亡一三九人（以上権藤成郷氏による）

× ×

日本近海に起る津波は、全世界に起る津波総数の五分の一強に当るといわれ〃ツナミ〃という日本語は今やジュードー（柔道）と同様に世界の通用語とならうとしているという。

なお、前記「宝永山爆発」地震は日本のシンボル富士山の爆発で、甲府市消防本部の御好意により調べてもらった文献があるので紹介する。「富士の研究」全七巻のうち第五巻「富士の地理と地質＝石原初太郎著、昭和三年九月八日発行」の中から

延暦十九年六月（紀元八〇〇年）に起きた富士山の中央噴火口と側火口と共に噴出した噴火は宝永の噴火と比して一層激烈なもので有史最大のものと思われる。貞観、宝永の二噴火は一方面の側噴出で余程小規模である。

宝永の爆発火口

宝永の爆発に於ては山体の一部が吹き飛ばされて其の跡には大なる孔を残している。此の孔を新内院と称へ中道廻りの通路は其の孔の底を横切る。其の東側に標高二七〇二、三米の突峰がある。之を宝永山と云う。宝永爆発の際の噴出物である砂礫及び熔岩の岩片等の堆積したものである

宝永爆発の際、江戸は五代将軍綱吉の晩年に当り文化の大いに発達した折なれば其の記録は比較的豊富である。故重野安繹博士は富士山噴火記（学士院雑誌第七編一三）と題し宝永の爆発に関する幾多の信憑すべき文書や記録を集載された。中でも吉田村の師職田辺安豊なるものの長歌体の記文を称讃されている。富士山附近に於て目撃せる際の記事で当時の状況を知るには最もよき手掛りと思うので十二支刻限を今日の時計時刻に直して其の大要を述べよう。

宝永爆発の状況

十一月二十三日の爆発に先き立ちて十月四日に吉田に地震があり、爆発前日の二十二日には夕刻から地震五十余回当日の明方からは数えることの出来ない程であった。午前十時頃に南方（吉田より爆発火口は南に当る）にあたりて天から丸き鐘程の光、降ると共に黒烟山の如く鳴動しつつ響く音や雷鳴がしきりにあった。午後八時頃火焔燃え火の玉天へ上る（熔岩の断片飛散しいわゆる火山弾となったものか？）。二十四日の午前十時頃には霞の如く薄けむりが四方にかかり須走村は石砂降りて天火で焼失した。午後八時には地震鳴動と共に光が一層増加した。二十五日には朝日がさしたが昼頃から又曇る。二十六日には西風出で黒烟も鳴動も漸く鎮った。二十七日には煙は高かったが鳴も光も和いだが晦日の午後八時には震動噴煙共に劇しく火の玉（火山弾か？）上る。十二月朔日から三日までは変りなく四日午前十時には地震起りて夜半まで続き火の玉も劇しく五日には南風起り昼過ぎには鳴動もあったが午後十時頃から爆発鳴も静まり六日、七日両日は平穏、八日地震数回夜半大震動火玉なお多く、九日の午前四時より穏かとなった駿東郡の足柄から富士山まで村里も草木も埋りて見えず小川の水も絶った。

〃続談海〃によれば、二十六日江戸に達したる報告を記して

十一月廿一日油井（ユイ）、神原（カンバラ）、吉原大地震卅度程（三十回程の意味）家一軒も残らず揺り潰され油井、神原辺には人影もなし。

と云い〃月見堂見聞集〃には当時の様子を左の如く記している。

十一月廿四日夜半江戸中地震且つ降砂、廿五日夕又地震箱根、小田原大雷鳴焼石降る相州から江戸まで凄しき赤雲現はれ藤沢から上の方には一分餅の程なる焼石降る云々

当時江戸の状況如何と云うに新井白石の〃折焼柴（おりやきしば）〃の記に

十一月廿三日地震雷鳴（空気の振動に基づく所謂鳴動ならんか？）降灰あり南西の方黒雲起りて電光頻りなり西城に参りしに白灰地を埋めて草木みな白く御前に参るに天甚だ暗かりければ燭を挙げて講し侍べる戌の刻（午後八時）に灰降ることやみしが地震は絶えず。廿五日も天暗く雷の

震する如く夜に入り灰又降る此の日初めて富士山焼けのことを知る是より後降灰止まず云々

当時噴火の報告が漸く三日目にして幕府に達したのである。又〃翁草〃に江戸市中の状態を述べて

宝永四年十一月廿三日午刻時分いつともなく震動し雷鳴頻にて西より南へ墨を塗りたる如く黒雲たなびきて暗夜の如く昼八ツ時（午後二時）より鼠色の灰降る晩景に至り段々烈しく後には黒き砂大夕立の如く降り来りて終夜震動し廿四日午後二時過ぎより空暗きこと夜の如く物の色も見えかね往来絶へ適々往来の人此の砂に触れて目くるめき怪我などせしものありとかや云々（続談海以下其の大要を摘記す）

震災予防調査会報告（第六十七号八十六号）によれば富士山頂と江戸本郷との直距離は一〇一粁であるから空気が音響を伝えて江戸へ達するには約五分を要すべきである。また大破裂の初発後三時間をへて灰を降らしたとすれば当日無風なりしに係らず大気の上層に於ける風速は一時間三十粁内外なりしなるべく而して江戸にては夕刻に及び初めて砂を降らしたるを見れば噴出の最も激烈を極めたのは初発より四、五時間後であろう（同報告書には当時江戸に於ける状態をすこぶる詳細に学術的に述べてある）これを要するに宝永四年の爆発は十一月廿二日夕刻の地震の頻発に始まり（是より先十月四日にあった地震は其の誘因か？）二十三日の大爆発となり爾来幾分の消長はあったが全然鎮静に帰したのは十二月九日の朝で十八日間に亘ったのである。この間地震のため家屋は倒壊し（南麓の海辺地盤脆弱の地方最も激烈を極む）砂礫は東方の村落田畑を埋め江戸までも及んだ。此の砂礫は黒色を呈し今日尚須走辺には数米の厚き層をさえ認め南は印野辺に至る。上方爆裂火口に近づくに随って大小の熔岩塊を混ゆ此の熔岩塊は何れも抛出されたるもので鏗節形、茗荷状或は稀に球形又は桃実形を呈するものあり。其の空中に投げ出さるるや灼熱する熔融体たりしを以って遠方よりは火の玉の如くに見えたのである。〃塩尻〃に

十二月の初相州佐川（酒匂川のことか）へ人の首又は手足など多く流れ来るも　ふじの山下の村、「石に打たれ形くだかれて　かかる者も流れ出でけるにや」と旅人もうたっておどろく云々

等の記事あるを見れば人畜の死傷も（主として東の麓に）相応にあったことと思われる。

延暦貞観宝永三大破裂の比較

宝永の爆発は最新のことでもあり幕府の所在地たる江戸に近かった為幾多の文献も残り比較的明細に知られているが富士山東南側の一極部に限られたもので其の噴出物は主として砂礫であった。然るに貞観の破裂は反対の西北側に於ける側噴出で大規模な熔岩を流出した其の状態は恐くは大正三年桜島の破裂におけるようであったと考えられる。然るに延暦の破裂は富士山、中央噴火口はもとより周囲に側噴出をなし熔岩を吐出し砂礫を飛ばし富士の全体に亘った大活動で最も激烈を極めたものであった。』

明和五年六年の地震

〔妙専寺年代記〕明和五年戊子六月大地震、土井隼海母ノ両親古川ニテ埋死、大火ニテ当寺吊鐘ワレ候ニヨリ、トリオロス。堂モイタミニ付トリタタム』とあり、これに対する他の文献記録は見当らないが、埋死二人、大火が発生して妙専寺の吊鐘が破れ、堂がいたんで片付けたというところからみれば相当大きなものと思われるのである。

※参考、理科年代には明和五年六月九日琉球で大地震があり、高さ数尺の津浪あり。慶良間島に家屋損害九棟あり。王城石墻破損（那覇付近の海底）。というのがある。

×　　×

日向国史によると、「明和六年「七月二十八日地大に震ひ、延岡本城の石垣を崩壊す。仝十二月十六日当秋、地震大風雨等の災厄あり。且つ前年より家士の窮乏甚しきを以て、是日、貸銀に代ふるに大豆を以てす。」とあり、七月二十八日高鍋城も破損しておる。験震時報には、この地震を八月二十九日と扱い（新暦）、理科年表によれば「日向豊後。諸城破損す。（宮崎東方沖）M七、四」。日向雑記によれば「日向、豊後両国の地強く震ひ、屋舎崩壊す。この時近国もまた震ひ、薩摩国沿海の地は津波の害を被れり」

とある。

安政元年の大地震津波

安政元年（嘉永七年＝西一八五四）の地震津波の特徴は関東大震災以上の超大型級のもので被害も大きく、しかも松代頻発地震の如く長期間続いたと思われることであり、年代も近かく百十二年前のことで、いろいろと資料や話が残されている。

〔理科年表〕十一月五日、東方伊勢海より西方九州東北部に及び土佐阿波紀伊甚し。M八、四。大津浪は房総半島より九州東岸に及ぶ震災地を通じ住家全潰一万余。焼失六千。土佐紀伊大阪にて津浪のため流失一万五千。其他半潰四万。死者三千。震火水の為の損失家屋六万（南海道沖）

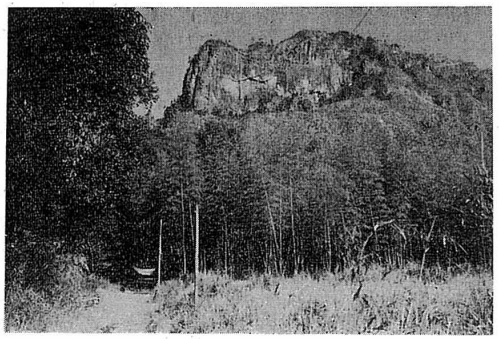
仝十一月七日、豊後豊前伊予。M七、〇。大州吉田大分等に潰家あり（大分三崎半島線）

〔島野浦沿革記〕嘉永七年甲寅十一月五日七ツ時ヨリ大地震ニテ津浪差支夜ニ入リ二度、六日ニ至リ止ム。同日寅刻ヨリ雨降、七日辰刻雨止ム。已刻大地震、村方一流山ニ登リ小家掛シ之ニ住ム。十日十一日追々里ニ帰ル。若連中ハ昼夜見廻リス此ノ人数凡八拾名。費用金百八拾目位ト云フ

〔北川村郷土史料集〕沢武人編。北川村長井本村甲斐又兵衛氏自筆の災害記録の大要を記すと　十一月五日夕刻より六日七日八日十日十一日十二日十三日と夜ひる大中地震が頻発。夜間、『津波を恐れた村人たちは年寄子供牛馬を引つれて、提灯、たいまつをかざし氏神御山に避難す。その人数三百人余。』七日間たち籠る。また延岡町民、家中（士族）の者は今山愛宕山へ、大武町の者は無鹿山に集る。一方津波は毛無が浜（長浜）を打越し、潮高一丈（三米）北川を遡ること約一〇キロ、俵野の近くにある的野の瀬をだるませた。大分県佐伯では大海より潮高二丈余（六米余）、佐伯城の下近辺で一丈一尺。翌安政二年正月二十日大雨大雷、大地も動く烈しい夕立が来てあがり、寅十一月五日より卯正月廿日迄日数合せ七十六日の間、数十数百を数えた地震が続き、三月十五日夕刻より大中地震、明日寅の下刻まで五度。世はゆりなおすととなえ、その春は麦の大

豊作で村人たちは喜んだ。』

× ×



安政地震に落下した行縢山の岩壁

行縢（むかばき）神社甲斐秀雄宮司の話では九州第一の名瀑がある景勝行縢山の『雌岳の大岩磐は安政の大地震のとき落磐したと父から聞かされています』と、への字形に落磐の跡を残す岩肌を指さしていわれる。

光勝寺権藤正行老師の話では『吉村理三郎の祖父が、安政の地震はひどいの何のちゆてん家の軒が地面につかえよりました。』と

早日渡房市さんの話では、『私の祖父の話では、安政の地震の時、五ケ瀬川の水が板田橋の下を西に向ってさかさに流れていた。』と

千手カヨさんの話では『私の生家は中町ですが、祖母の話によると、うちの軒と前の家の軒がこっつき合いよった。』と

須美江町（須怒江村）甲斐勝三郎老人（明治九年九月生）の話

『甥（おい）の甲斐国敏（前延岡市消防団第五十八部々長）は私の母屋じやが、あれの家の戸には津波が来たときの水の高さがしるしてあった。村の者は皆記憶している。』と手で一米五六十の高さを示しながら『国敏の先祖の家は海岸近くにあった。津波で村は大ぶん被害があったと思うが、国敏の先祖は稜の枝にしがみついて危く一命を助かった。家は

崩れはしなかったものの津波で移動して住まわれぬようになったので、家をほどいて須怒江の一番奥まで引込んでしまった。』と津波の恐怖から家を移転させたことを話してくれた。

× ×

島野浦島の太平洋に面する東の絶壁に鼻熊というところがある。ここに行く道の馬の背のような所を〃波越〃と呼んでいる。高さ三十米ばかりあり、その付近に軽石や貝殻がみつかるが、津波のとき波が打越したので、その名があるという。

× ×

延岡藩江戸屋敷の古文書、嘉永七甲寅万覚帳には

十一月七日

一此節度々地震ニ付火之元厳重ニ手当致し置立退候様今暁従

公儀御触有之候付御家中江左ノ通大目付より為相触可然

と遂相談達

御聴にも今日大目付江御書付相渡之

二三八

大目付江

覚

此節度々地震有之候付而は此後之儀茂難計銘々立退方之儀心得茂可有之候得共兼々火之元之儀厳重ニ手当致し置早速立退候様向々江可被達置候事

十一月

右之通従

公儀御触有之候間御家中一統部屋々々迄火之元入念立退候様可被達候

十一月

壱通　六本木　重役

桜島の爆発と阿蘇山の爆発

火山の噴火爆発による地震で本県に影響が多いのは何といっても霧島で、国民百科によると西暦七四二年から約六十回の噴火の記録がある。日向国史や宮崎県大鑑にも記されているが延岡に直接の影響が見られないから書くのをとどめた。こと五六十年来特筆すべきものは、大正三年桜島の大噴火と昭和八年阿蘇山の爆発である。

大正三年一月十二日午前十時五分、数日前から震動を続けていた桜島南岳が黒煙と鳴動を伴って火をふき、二月上旬までに約三十億トンの溶岩を流失、約三十人が死んだ。この溶岩で桜島と大隅半島は陸続きになった（朝日新聞）噴煙三万尺（九千米）の高さに及び上空に昇ったヨナが宮崎県北部地方にも流れて、延岡は勿論、北川方面も各家屋の屋根や田畠は雪景色ならぬ灰をかぶって、一面灰色になり人々を驚かせ、黄塵ならぬ灰塵は数日間天を覆って視界を遮り、眼が痛んだという。また、海面には無数の軽石が浮き、浜にも打ち上げられたと聞く。

※ 北川村長井本村、甲斐又兵衛災害資料には嘉永四年二月六日夜降灰の記事あり。原因不明

× ×

阿蘇山の大爆発の中、昭和八年二月二十四日から一週間続いた爆発は特に激しく、その轟音が延岡地方にも聞かれた。

ドロン、ドロンと地ひびきたてて聞ゆる爆発音は、日向灘でその頃よく聞かれた帝国海軍の演習に軍艦から打ち出す大砲の響かと思われたが、あまり長時間続くので何時もと異って不審に思っていると、阿蘇の爆発とわかったのである。

昭和六年日向灘地震

十一月二日夜、宮崎県下に大きな地震があった。延岡地方では明治以来の大きなものといわれる。

初震は午後七時すぎで、引続いて何回となく震動、消防組は、『津浪来襲の心配があるから避難して下さい。』と連呼して回った。これを聞いた住民の一部は城山、今山、愛宕山へと避難し、リヤカーなどで身回品や食料品、蒲団などまで運ぶ者もあり大騒ぎ、三つの山は避難者で一ぱいであった。山に避難しない者たちも、それぞれ近所に集まったりして不安な一夜を明かしたのである。

延岡新聞の屋田記者は地震の夜、取材に回って光勝寺に

二三九

立寄り雑談していたが、揺れるたびに飛び出そうと腰をあげて膝で立つ。あまり何回も繰り返すのでおかしかったと権藤繁さんはいっている。延岡新聞十一月三日の夕刊には取材の地震記事が一ぱいであった。

浜町、山本七郎さんの話

『うちの隣りに七十才ぐらいの婆さんが一人住んでいた。あの晩、ひっきりなしになえ（地震のこと）があったので津波を心配した婆さん、「大丈夫じやろかい？逃げる時はつれにござい。」と三べんも四へんもやって来る。夜は寝もせんようである。これを聞く方もたまらんが、落ち着かせにやこまると思って「鶏が鳴いたら津波は来んげな。鶏が鳴くのを気をつけてござい。鳴いたら大丈夫じや。そんなに言われちよる。」といい聞かせた。婆さんは、「そんげなこつがあるとじやろかい。」と帰ったが、間もなく鶏が鳴きはじめ、婆さんは来なくなった。津波がくるとき鶏がとんでゆき波の花を蹴った。という話があるので思い出して話した』と。

宮崎県災異誌によると、「二日午後七時三分強震（震度五）起り、宮崎市内外の電灯は同時に消灯し……」

チリ地震津波

地球の裏側、南半球である南米チリに大地震があり、日本まで津波が押し寄せたのである。

昭和三十五年五月二十四日の日記には、「三陸方面に大津波が発生し、相当大きな被害が出た模様。午前六時のラジオニュースを聞いて驚いた。被害は時間とともに益々大きくなる一方。七時には高知県まで津波警報が出た。午前八時、宮崎県にも発令さる。午前十時延岡市役所経由で県から警報発令の通報が消防本部に達し、ただちに島浦、熊野江から赤水、鯛名まで電話或は宣伝車を廻して警戒するよう伝達する。午后六時子供ニュースの時間には、死者八十五。行方不明七十二。浸水家屋四万二百戸。津波の高さ五米といっていた。まだまだ時間がたつにつれ被害は多くなるようだ。

原因は南米チリ。関東大地震より大きく、百年この方ない津波とか。警報も経験がないために発令が遅れたと云っている。」

島浦町、長野和好さんは、この朝延岡通いの日豊丸に乗船し、方財の州の鼻（延岡港）を入りかかった時、ゴオ、ゴオ、ゴオーと船底が海底につかえ、いつもと異った異様な音と共に船が傾いたので、甲板に出て見たが、潮が引いて川の流れがひどく、あわや転覆というところを、すぐ後波を得て立ち直り事なきを得た。後で、これがチリ地震津波とわかった。」といっている。

日豊汽船専務の黒木済氏はこれについて、『延岡港口の一番浅い所が干潮時、水深二・三米であり、日豊丸の船底が水深二・三米ですから、干潮時には時々船底がつかえることがあります。チリ地震津波の時は一キロぐらい間をおいて、高さ二〇センチ位の波が十貫（地名）船着場までやって来ました。不断の風波とは異った波で、気味悪く濁っていました。』

国民百科には、一九六〇年五月二十二日。チリ。死者九〇九。ゆくえ不明八三四。チリ津波による日本での被害（死者一一九。全半壊流失約五千）

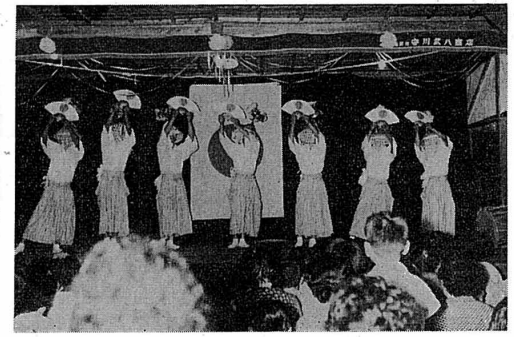
チリ地震津波による宮崎県下各検潮所に誌された潮高

油津	二・二五メートル
宮崎	〇・六二
細島	一・八八
延岡（東海）	〇・八八
福島	一・五〇
津波によるひき汐（午前十時五〇分）	一・〇一メートル

伊福形〝花笠踊〟の由来

延岡市伊形町（旧伊形村伊福形）に古くから伝わる花笠踊がある。毎年旧暦お盆の十六、十七日になると、ばんば踊がはじまる前に公民館の中でこの踊がある。

三百六十年の昔、同地区を大津波が襲ったが、その際、七羽の白鷺が石田部落に舞い降りて、たわむれたことにより津波が引いたという古事に因んで今日まで伝承されているもの。



伊福形の花笠踊り

踊子は、今年二十才の成人式を迎えた男子七人が選ばれる。両親ある者に限られ、新盆の家や片親のものは加わらない白衣に白袴の白装束で、頭には白鷺を形どったとみられる花笠をかぶって踊る。

踊は三番あり、一番は鈴二番は御幣、三番は日の丸の扇、太鼓のはやしで踊るが、土々呂町霧島神社の岩切好雄宮司の話によると、『私は毎年お祭に行っていたが、花笠踊は竜神祭の神楽である。部落の休日を利用するために、お盆にしたものと思われる。』と

公民館から拡声機で、その由来を放送するので、原文の写をもらった。

『花笠踊の由来を申上げますと、今から約三百九十年前、天正年間だと言われております。伊福形部落は大潮にみまわれ、山麓も通れなかったそうです。そのため農作物はもちろん、人畜までも奪われました。村人達は伊福形の石田部落の山王神社（さんおんじんじや）に祈願して、もし大潮がなくなればお礼として踊を奉納するからと誓いまして歌を作り、踊を作りまして、旧暦七月十六、十七日に舞うわけです。

なお、神話別伝を申上げますと、伊福形部落が大津波にみまわれ、七日七夜朝、村人達は苦しんだそうです。村人達は皆んな揃って、ある山に避難して、神様や仏様にお祈りしますと、不思議なことに何処からか七羽の白鷺（鷗＝かもめともいう）が舞い降りて来て海で遊びますと、これは何とあの恐ろしい津波は平穏にかえりました。村人達は、これは神仏の救いだと歓喜して、それ以来現在まで七名の若人が花笠をかぶり、着こなしをして、この花笠踊を奉納し続けて来たのだと伝えられております。』（完）

伊福形花笠踊の歌詞

一番（扇で踊る、昔は鈴）

① （はいや）籠めせ籠めせ（は）鳥籠の（よーはいはい）
（は）　やまがらが籠のうちでも（は）恨みごと（よーはいはい）
（はいや）籠がえー小籠でのー（さて）遊はれず（よーはいはい）
（はいや）籠がえー小籠でのー（さて）遊ばれず（よーはいはい）

② （はいや）籠めせ籠めせ（は）鳥籠の（よーはいはい）
（は）　秋鹿が恋にこがれて（は）野にいでる（よーはいはい）
（はいや）縁がえー遅いかの（さて）添いもせず（よーはいはい）
（はいや）縁がえー遅いかの（さて）添いもせず（よーはいはい）

③ （はいや）籠召せ籠召せ（は）鳥籠の（よーはいはい）
（は）　武蔵野の苅の数ほど（は）かよえども（よーはいはい）
（はいや）縁がえー遅いかの（さて）添いもせず（よーはいはい）
（はいや）縁がえー遅いかの（さて）添いもせず（よーはいはい）

二番（御幣で踊る）

① 天の戸を開いて月も（は）夜もすがら（よーはいはい）
すずしき拝む　（はいや）神のきのうち（よーはいはい）
すずしき拝む　（はいや）神のきのうち（よーはいはい）

② 千早振るたむけの神楽（は）こいすぎて（よーはいはい）
神の心も（はいや）いさみます（よーはいはい）
神の心も（はいや）いさみます（よーはいはい）

③ 君が代に久しかるべの（は）ためしにわ（よーはいはい）
かねてぞ老いし（はいや）住吉の松（よーはいはい）
かねてぞ老いし（はいや）住吉の松（よーはいはい）

三番（扇子で踊る）
浜の真砂に戯うつ波は
さーらり、さーらり、さら、さーらと
引いたるところは、のーうれしや（以上）
× ×

伊福形を襲った津波の起源について調査してみると、養老年間といい、天正といい、慶長といい、全くまちまちでこれという定め手は見当らず。公民館の放送も根拠がない津波の来襲というなら慶長九年の津波ではないかと思われるのである。

竜　　巻

海水でも船でも家でも人でも牛馬や列車までも手あたり次第に巻きあげ、天から血の雨、泥の雨、魚の雨ふらせたりする暴れん坊の竜巻＝その被害範囲は国民百科によると「幅二三十メートル、長さ四五百メートルがふつう」と記してある。

加藤茂教著「気象と災害」には『一九三五年アメリカジョージア州に起つたトルネード（竜巻の呼び名）は、州の端から端まで延々五百キロメートルを時速十五キロメートルで進んだ。損害の最も大きかつたゲインズビール市では、この通過に伴ない、れんが造の市役所や裁判所は木っぱみじんとなり、牛や鶏が文字どおり宙に舞い上がつたということである。宙に舞わないものは飛散する木片などで全滅し農家の麦わらが猛烈な勢いで吹き飛ばされてきて、近くの電柱に針のように突きささつていたということである。ちよつと信じられないくらいであるが、これは事実である。このトルネードによる損害は、死者百三十一名、全壊家屋は千二百戸で、市の全家屋の五分の一を越えていた。』とある。

この暴れん坊、竜巻の古い記録が見当らないのは被害が局地的に限られているからかも知れない。

一、嘉永三年の竜巻

門馬延俊の資料によると『嘉永三年八月七日延岡稀なる大風にて領内伏家或は難破船多く死傷あり……』延岡藩役所も倒壊した如く見ゆるが、これは竜巻ではないかと推定される。北川村長井本村甲斐又兵衛自筆の災害記録によると（沢武人編北川村郷土史料集より）

『嘉永三年戊（西一八五〇）八月七日大風

一、其日の九ツ時より風つよく、屋根を吹きおとし、いたみある事はかずかぎりなく、川筋の舟をふきあげ、すなはち竜巻の如くあいみえ、木、かや、草木迄もかれ、木かれの如く、又長井村之内ふせや（伏家）八ツ九軒たおれ、作方は申におよばす、高きび、ゑこのるいは、たねこれなく東浦川口辺はたびの舟いかりの綱を吹つきり、五人乗りの者みなあいはて、船頭壱人の死骸汐上り、是又いづみややとひ舟之夏

一、御家中様御いたみ之儀は、御役所之当りいたみ多く、又町方は屋根のかわらを吹きおとし候

一、長井家田無田米之儀不残いたみ、尤はやものの分は半作斗、おそものは種もなく、其年の御上納御蔵米壱俵の直段貫人は百目也。同亥年正月よりは大麦壱俵直段五拾七匁斗、小麦壱俵は八拾目、白米壱升三匁、大麦壱升壱匁九分とふいも（唐芋）壱升は八分、はだか麦壱升は弐匁弐分、品々右之直段に而御座候江共二月がかりには買入候品もなく村中不残、こゝ、わらび、かすねはりてみな命をつなき候事』とある。

二、明治十七年の竜巻

延岡内藤藩家扶松井一の日記の中に竜巻と推定せられるものがある。

『明治十七年（西一八八四）八月二十五日、雲朔り小雨降り、午后二時過風勢強きに亟き模様悪し、四時五時過ぎ頃南風の力烈しく未曾有の天災なり。橋を裂き、小屋を倒し所によりては坐中のたたみを飛ばし、舟を空中にとばし覚えず襟胆す。是より前四、五日を隔て二日程朝霧深く或は旭陽映し東天紅の如く全く天災の前表なるを知れり。』とある。

台風と水害

明治三年の洪水（資料）

市内南町妙専寺年代記には

『明治三年庚午九月五日夜四ツ時ヨリ雷雨、六日又雷大雨両橋流、九ツ水庭ヲ通リ、七日大雨洪水床ニ四五寸上リ当寺仮門流失』とある。

長井村諸願控帳には

『乍恐以書付御達奉申上候

一、居宅壱軒　棟行三軒梁九尺伏家

一、人馬怪我無御座候

一、田作　三分之痛

一、畑作　芋四分之痛。唐芋五分之痛。粟七分之痛。蕎麦大根、荏九分之痛。黍四分之痛。

一、新川、川除　壱ケ所

俵野門

一、本谷筋痛

一、所々道筋痛

一、水高サ凡壱丈九尺

右者去ル五日より七日迄大風雨増水ニ而諸作并所々痛前書之通書上如斯御座候以上

午九月　庄屋　甲斐八左衛門

郡政掛民政御局御役所　』

とある。前者南町妙専寺は高い所ではないが「床ニ四五寸」とあれば相当な大水であり、両橋というのは大瀬橋、板田橋のことと思われる。後者、北川村俵野で凡壱丈九尺の増水である。

明治十三年の洪水と三福寺のぬれ仏

昭和十八年の洪水は、大瀬、五ケ瀬、祝子、北川の四川が大氾濫し、昼間の洪水にもかかわらず死者、行方不明六十三名という大変な洪水で、年配の人ならみなご承知であ

三福寺のぬれ仏

るが、明治十三年の洪水もこれにおとらぬ大洪水であった

延岡郷土史年代表には、明治十三年月不詳大洪水があった。五箇瀬川二丈一尺（六・四米）。大瀬川二丈三尺（七米）の増水。」とあるが、月日と、その一端が妙専寺、光勝寺に記録されている。

妙専寺の年代記には

「八月四日夜ヨリ出水、本堂下陣浸水。

三須三輪岡富大貫田畑大損。

川原町柳下大クズレ

御堀口下水通ゼズ各橋皆流

死者四十人余

高千穂山陰所々山崩ル」とあり、

光勝寺の過去帳をくると明治十三年に、

「釈尼妙貞七月一日新町白石善三郎妻サダ釈尼妙蓮七月

一日

白石善三郎（豊前屋）抱人イト事右二人善三郎ト共ニ

大洪水ノ為居家流失一本橋（橋名）吉平ノ竹藪ニ掛リ

善三郎ノミ竹枝ニ取着夜明ヨ待チ一命ヲ助ルヲ得タリ

而シテ二婦人ハ其ノ少下ニ死体ヲ発見セリ」と特筆されている。

この洪水で大瀬橋、板田橋をはじめ小橋もみな流失した妙専寺下陣の高さから考えると現川中地区全戸が浸水している。当時岡富村に属していた新町の川原から下手一帯が洗われ、この辺は一変したといわれる。

市内北町、名刹九品山三福寺の境内、山門を入ると本堂の左前方に御影石の露天仏、阿弥陀如来の坐像「ぬれ仏」がある。（全高二・七六米。仏身一・三七米。蓮華座〇・二九米）これは、明治十四年、新町の川原から三福寺の境内に移されたもので、最初は境内右側にあった大きな松の木の下に移され、その後現在の位置に移したものである。

「ぬれ仏」のあった所は、ぬれ仏があったため地名も「ぬれ仏」といい、昔、処刑場であった。（註＝現延岡商工会館南側で川の中に当る）何時の頃できた処刑場か、幾人処刑されたかわからないが、ここで処刑された死体は舟に積まれて川を渡り向い側の柳原（現須崎橋南詰付近）という所に葬られたとか。

「ぬれ仏」について記されたものは見当らない。ただ一つ「五ケ瀬川水系の水害史」に元延岡町長故小林又次郎の記録がある。これには明治十七年と記されているが、この文の最後に「一家三人共に流失した姓名不詳於系…」とあるのは、前記光勝寺過去帳の「抱人イト＝お糸」であり、「櫛吉」は「吉平」、「亭主の某」は「白石善三郎」であり「養母」は「妻サダ」ではないかと思われる。真疑はさておき次にこれを紹介する。

『柳沢町新町の境界道路の南端東側（現柳沢町喜楽湯のところ）には金丸と称した中町カンと云う美人の女髪結の宅があり藤本止四郎の裏には山内幸吉、黒木源吉（ゲン）伝鍛治（ぢ）の宅某東側道の中に吉田藤四郎の紺屋があり藤井要蔵（現延岡商工会館の位置）の南隣は草庵で天晒しの濡仏があった。今三福寺の境内にある花崗石の石仏がそれである。草庵の東に鋳物師の坂口佐十郎（明治十年の役に大砲を作った人）の宅等があり、三町余（三三〇米）東の畠の中に櫛吉や田中駒吉の家があり今の鉄橋の辺である。

此の辺は四面広漠たる麦畑で櫛吉の前から東の方菜種畑を

経て東部が磧原で其の先に棺付場があり道の両端には樗の並木で秋の紅葉は一入の美観を添えたものだ。櫛吉の南端畑中で明治十年の役に薩軍が間諜三人を斬首した余輩の記憶を辿れば、始めの一人は三度目に首が落ちた。無論刀手の未熟に起因するのである。斉藤猪満造の兄猪喜造である三番目は記憶に存じて居ない。明治十五年に早竹と称するものが笠原大吉を斬ったのも此の処である。早竹は男らしく腹を切って死し大吉は四十八ヶ所の重傷を負ひしも幸に致命傷を得なかった。明治十七年の大洪水に一家三人共に流失した姓名不詳於系と称するものの家である於系は櫛吉の北の方畑中に腰部を砂に埋めて死体となり亨主某は櫛吉の裏手の藪中に養母の死体と共に漂着していた。斯くの如き広漠たる地籍が減水と共に流れ去ったのである。』

市内山下町馬坂で郷土玩具〃昇り猿〃をつくっておられる三浦常義老人の話

「私は明治十三年生れの双生児です。現在の中央ロータリーのあるアヅマヤ商店のある角が私の元屋敷で大きな家でした。生れたその年大洪水があり、二階の窓から手をさし伸し〃おむつ〃を洗ったが、二人ではあり乾わかすのに大変だったとよく聞かされました。」

また、〃ぬれ仏〃については、

「ぬれ仏のあった所に渡る橋を囚人橋と書いて「じゅうじん橋」と読んでいたが、船板で造った四間か五間の橋であった。囚人橋の北側に南無妙法蓮華経と刻んだ高さ五尺、巾一尺二寸位の御影石の碑があり、すぐ上は進藤清さん河野しよう碩（河野二夫氏祖父）さんの家があった。この付近によく水浴びに行き、身体を干したものです。」と。

大正元年の大洪水と山津波

大正年間の大洪水は、大正元年十月の洪水と大正七年七月の洪水といわれ、特に大正元年の洪水は北川水系の有史以来最大のものといわれている。

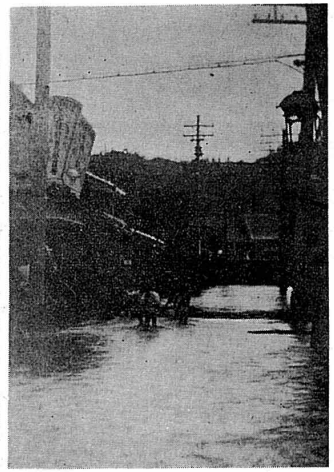
北川ダム建設による大分県電気局の調査「北川水系における過去の洪水実績」に、『大正元年の洪水＝下赤公民館の玄関コンクリート敷天端まで洪水位が上がる。EL四二・七〇M（推定）。昭和十八年九月の洪水＝下赤公民館の玄関コンクリート敷天端より〇・五〇M下まで洪水上がるEL四二・二〇M（推定）』

とあり、昭和年間大被害をおこした十八年の洪水より水嵩（みずかさ）が五〇センチも高かったとしるしてある。

大正元年十月一日、二日、台風により鹿児島方面に大被害が発生したが、延岡も甚大な被害があった。中でも行縢山の雄岳の山崩れ、山津波がおこり行縢川が大氾濫、十月二日午前六時ごろ新川（舞野町）では民家七、八軒が流失し、吉良ともさん及び嫁、孫の三人は梁の下敷となり、無惨な落命をした。（下舞野神社氏子総代佐藤仙次郎氏調）

大正七年の大洪水

大正年間最大といわれる大正七年七月十二日の洪水は、延岡市街で一番地表が高い中町まで全戸床上まで浸水し、町中を川舟が行き来し、恒富堤防、現在安賀多橋南詰付近が決壊して浜川に流れこみ、方平和合寺墓地の一部を洗った濁流は出北部落まで一キロ余、巾一五〇米の田圃を川原と化し、一方、岡富（昭和町）来迎寺墓地も洗われて白骨が累々たる大被害が発生した。



大正7年の洪水（今の市役所東通り）姫野しのさん提供

宮崎地方気象台及び延岡測候所の資料によると、七月十一日から十二日にかけて日向灘を海岸沿いに北上した台風であり、東臼杵郡は大水害が起った。

東臼杵郡の被害

死者二人、行方不明一人、傷者五人、家屋全潰一三戸、家屋半潰三二戸、家屋流失三六戸、床上浸水四、五二二戸、床下浸水二、九〇七戸

七月の雨量表　観測所　岡富…東臼杵郡役所　北方…北方村役場

日	岡富	北方
1	—	—
2	—	—
3	7.9	1.8
4	3.8	2.4
5	4.5	2.3
6	27.0	3.6
7	—	1.0
8	1.0	2.3
9	22.2	50.8
10	109.9	100.4
11	167.3	240.3
12	—	0.9
13	6.0	—
14	—	2.7
15	6.6	1.2
16	—	7.0
17	2.0	35.3
18	7.8	10.1
19	9.5	30.5
20	20.5	40.7
21	—	16.0
22	82.0	70.4
23	1.8	3.2
24	26.2	40.9
25	65.2	10.7
26	13.5	27.5
27	—	0.2
28	—	0.2
29	—	—
30	—	—
31	—	—

※「北川、祝子川の鉄砲水と人命救助決死隊」の項を参考にされたい。五ケ瀬川の洪水は奥が深いので本雨量表はただ参考まで。

この台風は最低気圧が岡山で九七三ミリバールを記録し全国の死者四七一名。

なお、この年は洪水の当り年で、六月十五日も梅雨前線による洪水があり、七月には台風が三回接近し、二十日と二十四日にも出水があった。

大瀬川水害予防組合嘱託山本七郎さんに聞くと、

『私の日記は、まことに簡単で「七月十二日（旧六月五日）暴風雨大洪水」と書いているのみですが、安賀多橋の際が切れ浜川に流れ込んだが、一口に申せば、浜川右岸全線と答えるべきと思います。出北渡場が決潰したのが午前七時半で、浜部落に浸水したのは八時とされた。この三十分に東は惣領、浜砂前面を丸ケ島下迄。西は方平（ほうびら）、別府西を別府川を越えて伊達前を浜部落の西側を平原下に水深一米程に没したので、激流呑瀑流というべきであった。お察し下さい。井替川迄影響したのであります。』

新町の料理屋〃戸高亭〃戸高理吉の娘某は、この堤防決壊の模様を二階から見ていたが「大瀬川が傾いた。」といっており、手をたたいて喜んだそうだ。それというのもこの堤防決壊がなければ川中地区の被害はまだまだどれだけ激しかったかわからない。

恒富堤防にはこんな話がある。延岡町（川中）と恒富村とは対岸であるため、延岡町を敵視し、洪水がおこらないように延岡高校正門前から丸ケ島までの間築堤工事を大正四年に計画し、大正九年完工の予定であった。大正六年には大瀬橋まで完工したが、安賀多橋下は昔の村境い（畜産組合競馬場があった）で、岡富村ではなかなかウンと云わない恒富村長日吉幾治と岡富村代表県会議員鈴木憲太郎（後の延岡市長）との掛引が続き、大正七年には工事進行という矢先の災害であった。』

× ×

当時中町居住の千手カヨ（旧姓河野）さんの話

『私が小学校高等科一年の時で、大水の前夜は中町上組、あん粉屋佐々木の伯母さんの家に泊っておりました。七月十二日の午前五時ごろから中町筋が浸水しはじめ、一番出たのが、何時ごろでしょうか。中町中央にあった喜寿亭（料亭）、その西隣の第百四十七銀行支店（現毎日新聞通信所）付近が延岡町で一番土地が高いところですが、あの付近で一尺五寸（四十五センチ）ぐらい、畳がつかるかつからぬ位の水嵩でした。勿論、川舟が中町筋を通っておりました。洪水の後、水貫いに付近の人々が喜寿亭に行ったものです。また、延岡小学校は今の市役所にあったが、浸水の跡かたがついているのを見ると、校舎教室のガラス障子の下七・八寸位のところに線が残っておりました。（推定一・五〇米）』

× ×

昭和町来迎寺住職高久欣浄師の話

『大正七年の洪水はとても大きかったもので、この来迎寺墓地のお墓が三百基ばかり洗われて、お骨が沢山露出し、誰のお骨か判らず、父（高久大鏡師、大正十二年二月没）は笊（ざる）を持ってお骨を拾って歩いたと、よく聞かされました。』

× ×

筆者が小学校四年生、南町仲田薬店（現延岡地方法務局）前に住んでいた時のことです。私の家は大きく、表から裏まで三棟十五六間も続いていたが、表の水位が〇・九米裏が一・三〇米位浸水した。屋敷の南側は石垣で一段低く、専念寺の土地に続いており、その石垣の高さが約一・五〇米あった。

現延岡警察署の建物は大手門のあった地で庁舎の南側付近に電信柱が沢山小積であったが、この電柱が水に浮いて南町を流れ、その一本が家をかすめてガラス戸を打破った

また川舟で下から避難してきた老人を仲田薬店の軒から二階の窓へ苦心して連れこむ情景や、藤原酒店の店員が加勢に来て、自転車を天井に吊した情景などが頭に焼き付いている。大手橋がまん中からぽっきり折れて落ちたのもこの洪水か？

昭和十五年の洪水

九月十一日・十二日の洪水は安賀多橋で五・三五米。木橋の大瀬橋が流失し、コンクリートの須崎橋も南側約五分の二を残して流失した。大瀬川左岸桜小路堤防外側の川沿いには直径約七〇センチ、天然記念物にもなりそうなダラの大木や柳、椿、竹などの中に朝鮮人部落十数戸があったがこの洪水で流失した。

県下の稲は白穂となり、その被害面積は三万六千町歩といわれる。

最近、消防署、消防団が水防工法訓練を行なっている大貫堤防の本部がテントを張る突端付近に柳が一本あり、洪水に流され溺死寸前の人がこれにすがりつき警防団決死の救助作業が行なわれ、あやうく一命を助けた一幕もあった

昭和十八年の大洪水

九月二十日五ケ瀬川筋、野田右岸堤は溢流決潰し、大瀬川筋大貫の左岸堤は破堤、市内亀井神社裏手の工事未了、大瀬川堤防と桜小路の堤防の取付排水門の工事中で濁流は四ケ所より浸入し野田、大貫、野地地内三平方キロの田畑宅地は一大湖となり刻々押寄する洪水に耐へかね桜小路の破堤を見、急流は奔馬の如く市の心臓部中央街を瞬時にして押まくり父呼ぶ、母呼ぶ阿鼻叫喚の巷と化し濁流は大瀬川に向って落下し周囲石堤なるため容易に減水せず罹災者の救助思ふにまかせず五ケ瀬、大瀬川は益々荒れ狂ひ木材が家財が折重って流れ去る暗雲低迷水魔の跳梁に茫然とたたずむ。

ああ家が人が声をかぎりに救を求むるも救助の途なく、大風雨に怒濤にとぎれ〳〵に聞ゆる叫び声!!寺島の高野今朝蔵さん一家九名、恋島の浅井百吉さん一家七名、横山代吉さん一家五名等、流れる屋根上で…横山あや子さんは主人が出征中で港口に於て無心に愛児に最後の乳房を与へ、そのまゝ大海へ、或る一家は晴衣をつけて避難の寸前に押流され死の晴衣となり日の丸の旗を打振り部落に別れをつげる等、其の悲壮なる場面!!』以上は〃五ケ瀬川水系の水害史〃に見ゆる五ケ瀬川の河口におこった記録である。

この水害で死者行方不明九四名。負傷者二二五名。流失家屋四九五戸。半壊四七六戸。浸水家屋一九、八二三戸（以上は延岡市、南方村、北方村、北川村）を出した。

この台風は二十日午前六時、沖縄の東を経て佐多岬から日向灘を北北東に進み、正午高知県の宿毛に上陸しておりこのときの降雨量は

十八日延岡＝二〇九・三ミリ　高千穂　一〇七・〇ミリ
十九日延岡＝四七五・三ミリ　高千穂＝二九一・〇ミリ

× ×

須崎橋南詰の橋際が崩れて、洪水見に立っていた子供達十人の命をうばったが、五才の愛児を亡くした中島町二丁目金田カツさんは『九月二十日の昼すぎ須崎橋（惣領側の袂西際が崩れかかり警防団員等が出動して叺（かます）にガラ入れ作業をしておりました。この人たちが茶のみに帰ったすぐ後のこと、洪水見に行っていた子供達が縄張りをくぐって外に出、アッという間に居なくなってしまった。子供達十二人（青年一人を含む）が土砂と共に転落したのであります姉が弟をおんぶしたまま土砂の中から発見されたり、一家三人の子供を亡くした人、砂の中に埋って足のみ出ていた子、五日ほど過ぎて誰か見さかいが出来なくなった子、今

日まで遂に発見出来ない子など十人が亡くなりました。甲斐守さんは舟に乗っていたが、子供が流れてくるので引揚げるとそれが自分の子供であった。私の子供も今生きておれば二十八才ばかりの青年で……』と悲惨な思い出を語ってくれた。

× ×

大分合同新聞記者杉本清一さんの話

昭和十八年の洪水は延岡はじまって以来の大被害をあたえた。五ケ瀬川堤防工事中の天下橋下、野田の南方小学校付近が切れ、流れ込んだ水のはけ口は桜小路の堤防を決潰した。

二十日の夜明けとともに土地の低い桜小路一帯は除々に浸水をはじめ、私の家はまだ堤防が切れぬ前、すでに床上二尺も上っていた。二階で飯を食べていると付近の人々はみな避難している。こりや自分達も避難せにやいかんわいと煙にいろいろ乗せて長谷川ヨシさん宅に避難した。この時は、もう水が首まで来ていた。長谷川の二階で、五ケ瀬川が危い！亀井神社裏の堤防が危険だ！と五ケ瀬川の方を気遣っていた午前十時すぎ、武田新聞店の主人が桜小路堤防の上を東に向って駈けて行くのが見えた。こりやいかんわいと不吉な予感にうたれた瞬間、津波のような怒濤が打寄せ忽ちぐんと水位が上る。

長谷川の二階の窓を出て、屋根から屋根をわたり、ロープを使ったりして城山に逃げた。城山には拘置所の囚人など沢山避難していた。

あの洪水で、私の家はもうないと思っていたら、家の隅にあった二本の杉の立木が家をかばい、二階の上三尺も水位があったにかかわらず助かった。この杉に流家がひっ掛って流を変えたため隣の順道館道場が押流された。

差し出した命棹につかまったが、これが折れて死んだ人ようやく屋根につかまったが、その拍子に愛児をとり落して死なせた人。桜小路でも沢山な死人が出ました。

九死に一生をえた山津波

北川を遡り熊田で本流と分れ、日豊本線沿いの分流を小川（こがわ）と呼ぶ。市棚駅の北を鏡川（あぶみがわ）とまた呼び名がかわり、大分県との県境宗太郎を経て重岡に入っている。一方葛葉から北東、北浦村に入っているのが下塚川（しもづかがわ）と呼び、そのまた支流で大分県境の分水嶺、中ノ嶺（五四九）から谷を下り陸地（かちち）柚ノ内、矢が内の下流に松葉（北川村）という小さな部落がある。この辺ではちょっと人に知られた松葉観音のあるところ。

現在延岡市立西小学校々長平田愛蔵先生（明治四十一年三月生）に、延岡で大水害が発生した昭和十八年九月二十日の同じ日、松葉部落で山津波に遭われた当時の話をうかがった。

『十九日からの豪雨で水かさが高くなり、狭い谷間に濁流があふれていた。朝起きた時は小さな田圃や校舎跡はすでに水につかり、私がおった校長住宅の入口まで水がきた跡がついていた。

減水のようすが見えないので畳をあげはじめた。午前八時すぎから九時ごろであった。ゴゴゴーガラガラ不気味な音を耳にした。雨戸の隙間からのぞいてみると、対岸の山の尾根に近い高い斜面が動いている。『山崩れだ／逃げにやいかんよ』と妻に云ったか云わぬうちに足もとから払いとばされたような衝撃を受け、どうなったかわからない。

無我夢中、浮いている藁屋根に這いあがりながら流れていたが、幸い水の上に枝を出した木の下を流れる際に木に這いあがり、丘の上の校舎へと這いこみました。

対岸の山腹の崩れた岩土の流れが、谷一ぱいになっていた流れを一瞬せき止めるようなかたちとなり、一時的にダムの状態が出現し、堪えられた岩土が忽ち溢れて急瀑の状態となり、その濁流のほこさきが家屋へぶちあたったものと思われます。

五万分の一の地図でも大体わかりますが、小学校のある丘の向い側に松葉観音と下塚神社があり、下塚神社の石の鳥居の柱が川を越えた学校のある高い所へ、八〇米から一〇〇米も押し上げられていることからも、その物凄さを知ることが出来ましょう。また神社付近の前、上流に沿う田圃の石垣はこのため上流へ洗い返されているのが見られま

す。

校長住宅の私の居た家は一番西で、点々と三軒の家があり、三軒とも地盤から洗い流されました。私は妻と子供の二人を失い、お隣りの渡辺藤吉さんは一家五人のうち四人が死亡、東方にあった片岡さんは距離もいく分へだっており学校へ上る坂道の築地で流れを妨げたせいもあって、僅かに身を以てのがれることが出来て一家族は身一つで助かりました。

私の妻は一キロばかり下流で翌々日死体を見つけてもらい、一週間程後に子どもも四キロ程も下流で見つけてもらいました。私は熊手で掻かれたように全身傷だらけ、身についたものは猿股の紐一筋と云ったところ、おそらく壁のえつり竹の破れめでも脱けて浮かびあがったものでありましょう。深い傷がなかったのが助かった一つの原因でしょう。』と九死に一生をえた当時の恐怖を思い出されながら掌の傷の跡を見せられた。

※付記＝つり橋を渡って対岸、一〇〇米程下流の道傍に長野一重氏（学校の若い先生）の住んでいた小さな家があり川面からはかなり高所となっていたが、ここも一通り洗われた。長野氏は現在中川姓、熊野江中学校教諭在職中。

昭和十八年大洪水の思い出など

水嵩が増すのは陸閘に土俵を築くのが間に合わないほど速い。

徹宵警戒に当っていた警防団は各々の受持区域の堤防を守ったが、私たち第十二部（南町、中町、北町混成）は夜明けと共に部員を配して五ケ瀬川右岸、北町の陸閘閉鎖に当った。午前八時ごろ「稲見下の陸閘が危い。水が浸入しているから早く来てくれ！」と伝令がとぶ。

尼ケ塚忠次郎部長以下幹部は現場に急行した。戦争中のことで、住民男女（女はモンペ）数十名も出動して陸閘閉鎖に懸命である。刻々増水がひどく、全員息つく暇もない活動ぶりである。

団員を交替で朝飯にかえしたが、一度帰宅すると疲労もあって、すぐには出て来ない。「あんたも帰って来なさいと部長にいわれ、帰宅したのは午前十時半頃だった。当時、私の家は現在の延岡警察署建物のすぐ南隣り、児童公園になっている所で活版印刷所を営んでいた。

二人の子供を南町区長伊東久次郎さん宅に預け、隣組の人達と安賀多橋北詰めに陸閘閉鎖用の叺造りに出動した妻もいま帰り、子供を迎えに行ったところだった。家に入ろうとして、ひょっと南町本通りを見ると、濁流が白波をたてながら自動車の走るような速さで走って行く。わが家の方にもどんどん来るではないか！

こりゃ一大事!!わが家に飛びこみ、妻に急を告げながらすばやくモーターの取外しにかかった。床は全面板張りで、印刷機械器具も相当あった。水は何処からともなく浸入して、モーターを取外すと同時に板張りの上までやってきた。子供は、国民学校（当時の学校はとうよんでいた）二年七才と五才の女の子。「あんた達は、お利口さんだからここでおとなしくしていなさい。」と座敷において妻と二階へ品物を運ぶこと七、八回、子供は「母ちゃん、ぶーちゃんが！ぶーちゃんが来たよ」と水がきたことを教える水あしは以外に早く、子供は畳と一緒に浮いているのであった。

子供を二階にだきあげ、そのあと何回品物を運んだか？ものの三十分もたつかたたないのに床から三尺も水が上った。工場の機械や活字棚は依然として定位置にあるが、畳が浮けば床板も浮く、水屋が倒れる仏壇もタンスも浮いたり倒れたりあまりにも浸水が速いので何もかも諦めるより仕方がなかった。

「西村さん助けて！西村さん助けて下さい！」と南隣りの田崎さんが叫び出した。田崎さんとは板壁一枚だが四尺も水がきては動きがとれず、どうすることもできなかった。子供のいる二階に上って間もなく「西村さん、西村さん、窓をあけてくれ！」と、高い所から田崎さんの声がする。

二階南側の壁、六尺ばかりの高さの所に二尺角ぐらいの明り窓があった。この窓を打破って活字棚を梯子に田崎さん一家六人を導入した。田崎さんは高千穂町の人で、名は敬太郎。この日は親戚である高千穂町の田崎医院の御主人も運悪く敬太郎さん宅に泊っていた。田崎の家は延岡肥料

合資会社の肥料倉庫の裏で、中二階があり、玄関わきに橙（だいだい）の木が一本あったが、この橙の木をつたって屋根に上り、肥料倉庫と大屋根伝いに私の家まで避難されたのであったことに敬太郎さんは独眼の老人で、一歩あやまれば濁流に落ちこむのである。全く命がけの避難であった。

原田三郎さんという鉄工所の主人が五十米もある所から屋根伝いに一升瓶で水を持って来た。急激な浸水で食糧も飲料水も用意する暇がなかったので嬉しかった。

洪水は地表から七尺五寸（二・二七米）筋向いに鍵屋という旧家の大きな油屋があり、軒が低くて、水との高さに余り開きがない。この鍵屋にセパート犬が一頭いた。つないであった鎖をはづす暇がなかったらしく悲しい声で何時までも鳴いていたが、ついに溺死した。

普通の家より高い私の家が、これだけの水なら、土地の低い新町や船倉町はおそらく全戸の家が流失しているだろうと話したものである。

× ×

○警防団員の二、三名は中町のもと町役場前の団員詰所で水にあい、そうこうしているうち逃げ場を失ない、石の門柱の上にとりついて避難したとも聞く。

○大瀬川左岸、桜小路の堤防が決壊、中央部市街地全戸が浸水したが、この中央市街地の水位が五ケ瀬川より高くなった。そこで、この水が北町側三福寺裏の堤防約二百米に内から外へ逆に落差一米で堤防から五ケ瀬川に流れ込んだこれを見た北小路側の人々は、「さながらナイアガラ瀑布のように壮観だった。」といっていた。

○被害を大きくした桜小路堤防の決壊は、牧場の際が二〇米ばかり切れ、地盤面以下二米も堀れてバラスの河原となっていた。少し下の送電線鉄塔の付近も切れて、川舟が横に引掛って水を堰きとめていた。

○本小路は土地が低いため、軒並に二階までほとんど浸水したが、佐藤薬店前、桜小路からの突当りに仲さんと云う眼のうすい按摩さんが居た。この仲さんは、二階から足を滑らして決壊した濁流に落ち込んだ。奔流は仲さんを跳ね返し、筋向いである城山登り口の日平商店の二階に救いあげられた。

○南町延岡警察署の筋向いに伊東酒店があり、ここに食糧品組合があった。戦時中の物資不足は特に甘い物がひどかったが、配給用の白砂糖を全部ぬらしてしまい、どろどろの砂糖を配給した。

昭和二十年の台風

大東亜戦争は敗戦に終って間もない昭和二十年八月二十七日と同九月十七日の二度にわたり大暴風が襲来した。後者は有名な枕崎台風（台風番号四五一六）である。この台風は水害より風の被害がひどく、空襲で残った家屋の多数が倒壊し、さらに樹木の被害が目立って多かった。

〃榎（えのき）さん〃の愛称で知られた天然記念物（昭和三年九月仮指定）は樹令三百十数年、周囲目通り六・六米、高さ十米余もあったといわれる川原崎町の榎。土々呂町露島神社の象徴といわれた〃かぶと松・よろい松〃の二本（白蟻の害をうけていた）、須佐町熊野神社の檜の大木（直径一・七米）二本。今山八幡神社の昼なお暗い参道その他が露出するまで裸になったり、亀井神社参道の杉の名木十数本等も倒れてしまった。これ等の被害はどちらの台風であったか区別がつかぬが、後の枕崎台風の方が大であったといわれる

○枕崎台風

上陸時の中心気圧九一六・六ミリバール。半径六〇〇キロ。主な被害地＝西日本、特に広島、愛媛、鹿児島、宮崎。

死者二、〇七六人。行方不明一、〇四六人。負傷者二、三二九人。全壊家屋五八、四三二。流失家屋二、五四六戸。浸水家屋二一七、三二四。広島県厳島では山津波で死者一、二二九人、鹿児島では二米以上の高汐あり。

延岡市消防署佐藤慶治士長談

私が鹿児島県バンセイ（アオト）飛行場から復員の途中八月二十七日夜、復員兵数名と日豊本線高鍋駅に一泊したその夜はとても物凄い暴風雨であった。何時間たったか？風も止み明るくなったので夜が明けたものと思っていると

それは台風の眼であったらしく、またまた大風となり高鍋駅舎が倒壊し、付近の民家も倒壊した。私は駅舎の下敷と

なったが幸いにも庇の空間にはさまれて顔面と左手を負傷しただけで済んだ。

駅員や復員兵達十二三名の死者が出たように記憶している。衣嚢などの持物から海軍復員兵が多かったようだ。駅舎等の建物は空襲のためゆるんでいたらしい」と左手の疵あとを見せてくれた。

ルース台風と旭化成寮生の活動

ルース台風（台風番号五一一五）は昭和二十六年十月十四日鹿児島県に上陸、九州を縦断した最大級の猛烈な台風で、中心示度九二七ミリバール、風速七四・一米、西日本は大暴風雨にさらされ、死者行方不明九四三名を出している。延岡の水位は安賀多橋六・〇五米、板田橋五米、昭和十八年以来の水嵩であり、市の損害七億円といわれている

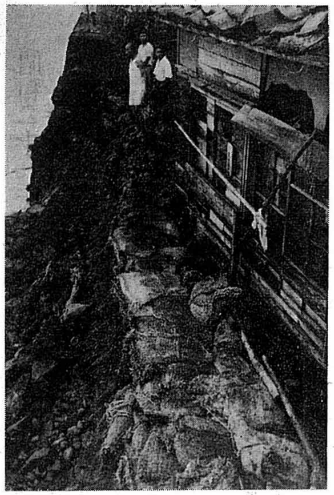
この日夕刻、「東浜砂住宅付近が危険にひんしている！」の情報をうけ、私は加藤消防長の命により吉田一消防士等数名と、かねて出動協定が出来ていた旭化成寮生二十余名を率いてトラック二台に分乗し東浜砂に出動。現場に着くや、す早く作業を開始し、畠の土を掘って土のうを造りはじめる。

毛無し浜、切れみなとは高汐のため切れて一面海に続き日向灘から打寄せる怒濤は白波を打ち立て、水面に僅か頭を出してるサギ島に打寄せている。東浜砂の堤防は太平洋に続き、あと六、七十センチで溢水するかも知れない。（実際は一米あったかも知れぬ）

もしも、この堤防が決壊したなら作業奉仕中の寮生は全員溺死し、谷底の如き東浜砂住宅は勿論、妙田、浜砂、惣領、金重、出北、別府から旭化成各工場まで忽ち泥海と化するかと思うとゾーッとした。

既に暗闇が迫って誰の顔か見分けがつかぬ。土のうは四五十俵も出来、その一部は堤防上まで運んだが、猛烈な強風に一歩踏みはずせば、これまた溺死は間違いない。

そこで、作業を中止し東浜砂団地三十余戸の住民避難に切替え、全員で全戸くまなく回ったが、住民はすでに避難しており、残る四、五人を発見したので自分達と一緒に行動するよう命じた。運悪く乗って来たトラックの一台が故障しエンジンがかからない。照明もない真っ暗闇で一人で歩くのは危険であるから、やむなく避難民を車に乗せ、寮生と署員はトラックの後押しをさせる。そして約一時間後の午後八時すぎ、署にたどり着き、避難民は延岡裁判所に無事収容した。



北小路の石垣崩壊現場の土のう

ホッと息つく間もなく次の出動が待っていた。「北小路の陸閘付近の石垣が崩れて危険である。」との報が入り、寮生、署員六、七十が出動した。寮生は現警察署西側に当る空地で土のう造り、署の主力は岡富分団々員数十名と北小路崩壊現場作業である。

出動した署員は湯浅、首藤、吉田梅、熊野、柳原、清成武藤等の大半であった。作業は相当危険が伴ない、駄目だというのを押切り、陣頭指揮に当った湯浅本部次長は『消防団員もよく働いた。旭化成寮生は引続き数百俵の土のう造り。後方活動ではあったが小言一つ言う者もなくよく統制がとれ、キビキビした活動は賞讃して余りありです。

崩壊現場は相当な流れのある五ケ瀬川の川べりや狭い露路で、股まで水につかっての命がけの作業。危険を感じた者は体に命綱をかける者もあった。被害現場は大久保漬物店西、野村義彦警部補の裏で、野村さんは懐中電灯を照してくれた。あんな時は少しの協力でも大変有難い。』と語る。

昭和二十九年四つの台風

台風銀座とよばれるが、この年には続けさまに四つの台風がやつて来た。

終戦後はアチャラさんの女性の名称でデラ、ジュディスグレイス、キジャなどと呼ばれていたが昭和二十九年から台風の発生番号で一号、二号、三号と呼ぶようになった。

岡富小学校の避難民

◎先ず八月十七日襲来の五号台風（グレース）である。私の日記には次の通り誌している。

『台風は新聞其の他の情報によれば沖縄より朝鮮へ、或は長崎県を通過する様に報じていたが、ラジオの情報が報を重ねる毎に情況が悪くなり、後には鹿児島の甑（としき）か阿久根より延岡へ抜けるものと思われると云い出す。天気次第に険悪となり午後一時、市に災害対策本部が設けられ、午後二時水防管理本部が吾が庁に設けられた。署及び団では朝より薬の名の堤防工事現場が危険とみられ莚張り工法による全長七十五米の作業を行う。

本部では夕食も炊出しを行う事になり帰宅せず徹宵の準備、夏期錬成休暇中の湯浅次長は四時頃電話があったが午後七時すぎ出勤、伊藤士長は上京に帰宅中。午後六時頃より本部には避難者が現われ、次第に数を増し、後には三百名を数ゆ。講堂より次々と部屋のあけ渡しを行ない二階の各室はほとんどを提供するに至り、人いきれで異様な暑さとなる。

刻々増水、十八日午前三時半大瀬川六・二五米となる。昼頃には風雨ともおとろえ午後二時半、三班に分れ調査に出る。（以下省略）

× ×

◎九月七日十三号台風襲来

（前省略）天候の模様が急に悪くなり、夕方、林田（篤）医師が雨に濡れながら注射器を持って来て注射してくれた『まだ出勤は悪いと云った。』が悪くなっても署員の志気にも関係があるので、今の様に具合が良ければ出て行くと云う。

午後八時、突風を衝いて出勤したが、台風はその頃が峠であり、水量も少なかった為、消防本部に避難した連中も午後十時頃には帰宅をはじめた。八日午前〇時解除（水防管理本部？）自宅待機となり帰宅。

× ×

◎九月十三日十二号台風襲来、大洪水

大瀬川安賀多橋の量水標の目盛りは六・五米までしか記してない。それが九月十三日午後五時から翌十四日午前一時まで八時間の間その量水標の目盛をオーバーしたのであるから正確な水位はいえないが消防署水位観測員の推定によると七米以上（二丈三尺）あったものといわれている。また大瀬川左岸の石垣堤防は〇・六～〇・八米下まで来て強風のため波飛沫が打越していたともいう。署、団不眠不休寸

北小路の浸水（延岡春秋社提供）

暇もなしの大活躍は賞讃されている。大瀬川北詰の堤防が大きくえぐられただけで決壊もなくすんだが、泥水は各下水口や湧水により中町通りの高地一部を残して殆んどの家屋が浸水。本小路一帯から柳沢町、新町等は一・五～二米船倉町は日豊本線付近の堤防工事未完成のため下からせり込み、水防管理本部の消防署控室は午後五時三十分遂に浸水をはじめ、夜と共に〇・九米浸水、不通になった電話交換台は全部取はずし退避した。二階の講堂は勿論、他の各室も避難民があふれて執務にまで困難をきわめた。延岡洋裁専門学校に救助にいったり、水が引いた後の消防署前で鮎を手づかみしたこともあった。

柳田福蔵消防士の家は浜砂町の堤防の外にあったため、ゴウ田宅と二棟流失し、石田、津山の二棟が半壊した。北小路岩鼻の高地にある加藤大三郎消防士宅は床上〇・六米浸水、古川町方面は山づたいで往復していた。

五ケ瀬川上流、国鉄日の影線第一、第五鉄橋の橋脚が流失し、鉄道が流れて復旧工事費三億円、セメントだけで二千トン、労力延人員七万五千人に達した。国道はズタズタに寸断されて交通杜絶日の影町その他流失家屋約百戸。

吉田梅男司令談

『夜なかの不明時、大瀬橋南詰堤防が決壊にひんし湯浅正士次長が付近の消防団員や旭化成寮生を督励指揮して水防に当っている事や大貫堤防決壊（現県営住宅付近）の報告をしに帰庁し、再度現場巡視に出、苦心して南町にたどりついた。西に向うに従って深くなり拘置所付近は背がたたず、元常備消防のあった高所から大瀬橋北詰まで行って驚いた。

橋際が崩壊しはじめ、某自転車店の家屋の半分が已に落下し、崖ぶちのようになり、陳列された新品の自転車が渦まく濁流の中につぎつぎ落ちこんで消えて行くのを見た。急迫した状態を一刻も早く付近の住民に知らせ、避難させるべく、班員を指揮して大声で一軒一軒叩き起して避難を呼びかけた。地元の消防団員にも連絡したが集まらない自家が浸水していてはどうにもならないのだろう……。』

×　×

◎九月二十五日、二十六日日記

（前省略）硝子戸の打つけをなす。時午後十一時半。雨、風共大した事なし。小雨、小風の中を徒歩で出勤する。署には加藤消防長、湯浅、大里両次長が居り、パンの用意がしてある。

午前三時前瞬間風速（消防本部測定）五十米、時速八〇キロ（中央気象台）甲斐利明消防士等は署に出勤するのに星をいくつも見たという。中心が通れば急に風止み、白雲の向を変えて飛ぶのが見うけられた。以後はほとんど小雨も無く水量も大瀬川安賀多橋で三米。午前七時本部解散となる。

※この台風が所謂〃洞爺丸台風〃で死者行方不明一、七六一名、北海道岩内町で大火をおこし死者三三名、傷者五五一名、三、二九八棟を焼いたのである。

大瀬橋北詰の崩壊現場（夕刊デイリー社提供）

昭和29年9月13日・12号台風による降雨量

	三ケ所	三田井	見立	北方	高千穂	廻淵	星山	菅原	五ケ瀬発電所	五ケ瀬発電所 水取入口	水ケ崎発電所	水ケ崎発電所 水取入口	道玄越
11日	4.5	3.1	18.1	6.1	2.8	4.4	5.7	7.4	4.3	8.5	4.2	4.0	8.0
12日	275.9	140.7	431.0	158.0	132.0	226.1	189.0	160.0	74.5	189.7	189.0	201.0	207.0
13日	411.5	150.6	527.0	185.2	138.0	欠	67.9	326.8	442.5	354.5	251.2	299.0	187.0

資料「防災気象」宮崎県防災気象連絡協議会発行

名、他重軽傷者を出した凶日である。

二十五日午後から雨となり、鮎やなは大漁と噂していたが、夜半から暴風雨となり風雨波浪注意報は洪水警報とかわった。停滞前線による集中豪雨である。二十六日午後〇時三十分水防管理本部が設置されたが、五ケ瀬川、大瀬川の水位は気にするほどのものでない。しかし、北川、祝子川は夕刻近く急激に増水しはじめた。いわゆる〝鉄砲水〟である。

午後五時ごろ祝子川は危険水位（三・七〇米）をまたたく間に突破して五米となった。坂宮では田圃に刈った稲の取り込みに夢中になっている間に逃げ道を失い、「逃げおくれた者が十数名いるから救助を頼む」の報に接し、太田消防団長指揮のもと市役所のダンプカーに川舟を乗せて坂宮に急行した。

逃げおくれた者は十一名であったが、既に五名は救助されて、後の六名（ほとんど女性）が二〇〇米も離れた濁流中に点々とある槻の木に登って救助を求めていた。派遣された伊藤、榊原両士長、日高、森（貴）、松田消防士の五

延岡の四河川指定量水表

河川名	観測所	平水位	通報水位	警戒水位	危険水位	堤防高
		m	m	m	m	m
大瀬川	三ツ瀬観測所	0.25	3.10	4.10	4.60	7.20
五ケ瀬川	板田橋	0.80	3.00	3.80	4.50	7.30
祝子川	祝子橋	0.91	2.50	3.10	3.70	7.30
北川	川島橋	1.20	2.80	3.20	3.80	6.00

北川、祝子川の鉄砲水と人命救助決死隊

昭和三十六年十月二十六日といえば別府・大分間の仏崎付近を走っていた電車に土砂崩れがかぶさり、死者三十一名は部落民松田敬六、松田健一と協力し、槻の木まで二〇〇米を二回往復し、救助に成功した。救助に使った古舟は水棹（みさお）だけ、櫓がなく本流に流されたら自分達の命もなかったといわれる。

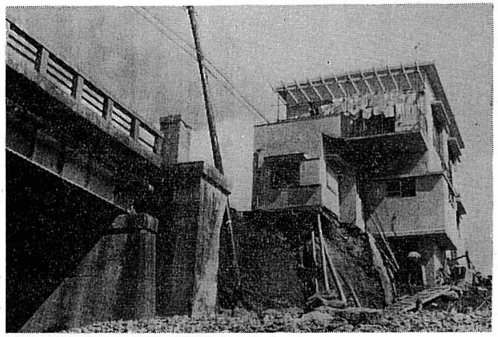
× ×

同じ時刻ごろ「佐野の柿の木に三人のぼっている……」と引続いての報あり、鍵田司令補、加藤士長、片寄消防士の三名は、松田一文副団長の案内で山越えしながら救助に出動したが、村人の筏（いかだ）により既に救助されていた。

× ×

仝日午後六時二十五分ごろ川島橋上流約四〇〇米の北川左岸の堤防が突然約一五〇米決壊し、濁流は川島部落約百戸が瞬時にして浸水してしまった。川島公民館の管理人田中章義さんは、そんな事とは露知らず決壊地点から一キロ下の県道を帰宅の途中、急性盲腸炎をおこし自転車をおりてかがみこんでいた。暗闇の県道が周囲の田畑より二米ほど高いので足元を洗いはじめた水に、ようやく洪水に気づいたのである。彼はただ一人、そばの電柱によじ登り声を限りに助けを求めたのである。

人命救助の急報に、山中消防長陣頭指揮のもとに直ちに二分隊が出動し、川島橋下に繋留中の川舟を曳きあげ、これに吉田司令補と太田士長が乗りこんだ。濁流渦まく暗夜を消防車のライトをたよりの救助作業は命がけそ



昭和39.9.24～25、台風20号の水に洗われた樫山橋北詰の家屋。
電柱は宙に浮き電線で倒れるのを支えている。夕刊デイリー社提供

のものであった。

救助に成功した吉田司令補と太田士長は舟こぎのベテランであり、二人の呼吸が全く命がけの線で見事な離れ技をやってのけたのである。ことに太田勇士長（現司令補）は深夜の東海川口付近をしばしば只一人で漁りに行き「太田いさり司令補」とあだ名のある位のつわものだが『殉職のことが救出まで頭にひらめいていた。』と云っている。

川島町今津玉木農園の玉木歳明さんに被害状況を尋ねると、『危険視されていた川島堤防は、決壊と同時に怒濤の如く濁流が打寄せ、アッと云う間に床上まで浸水し畳までぬらした。川島本村も約半数は床上または床下を百戸浸水耕地の被害は甚しく石原になった分でも約五町歩（五ヘクタール）、田圃の土砂による被害約五町歩、家作り田畠復元のための応急処置に約一ケ月を要し、甚しい所は今なお名残りを止めている。』被害地を〃青島の鬼の洗濯岩の如し〃とは彼の名言。

× ×

水防倉庫に一人で一夜を明した武藤季雄士長の話

午後五時すぎのこと「川島堤防が危険だという知らせにより吉田司令補、佐藤士長と私は調査のためジープで出動した。川島の堤防上を通過中すでに天端は溢水し、ゆらゆら揺れるのが感じられた。吉田司令補、佐藤士長は、この危険な状況を報告のため直ちに引返した。

一人残された私は部落民を召集し、水防倉庫の叺に土を入れさせ、四十三俵の土俵積工法を施した。とたん、ゴーッという無気味な音とともに約二〇米が決壊した（中略）

水防倉庫前の人が声をかけるので、見ると真暗な闇の中から白く長いものが出ているので、ゾーッと背筋を走るのを感じた。よく見ると白髪の老婆だ。お茶をご馳走になり水防倉庫に一夜を明した。

× ×

建設省延岡工事々務所の牟田礼孝所長さんと延岡の洪水に関係のある河川について漫談的問答を行なった。

五ケ瀬川は九州の尾根といわれる鞍岡（東西日杵郡境）から源を発し、三ケ所川と合流、熊本県馬見原（蘇陽町）を流れて大きく迂回し、一方、阿蘇外輪山から川走川、旅草川（共に熊本県）の水と合流、宮崎県に入っては河内川上野川、押方川、岩戸川、水ノ口川、日ノ影川、追川、日向川、綱の瀬川、曽木川、細見川、行縢川と沢山な支流があり、旭化成の七発電所をはじめ計十数ケ所の発電所があるくらい広範囲の水を集めている。これがもしも長崎県諫早地方に降った豪雨（昭32・7 25～26＝一、一〇三ミリ）のように、あるいはこれ以上の雨が降らないとも限らないが五ケ瀬川の堤防は大丈夫でしょうか？また、五ケ瀬川の長さは書類で見るとまちまちですが、何か定義でもありますか？

古書文献で見ると五ケ瀬川の被害は沢山見えるが、北川祝子川については殆んど見当らないが如何なものでしょうか。また、東海の追内川など僅か二キロ位で旭化成火薬工場（昭38・8・9）は工場内が膝から腰までも水が出て池の鯉は流れ出してしまった事もあります。北川、祝子川、沖田川（昭38・9・13堤防三ケ所決壊）、井替川（沖田川と同時決壊）などの川と五ケ瀬川とは水の性質が相違しているように思われます？

牟田所長談

川の長さの定義は、五万分の一の地図に出ている一番距離の遠い所からで、谷川の水が常時流れていると認められる所から川の線が記入表示してあります。」と五ケ瀬川改修計画平面図に印刷してある数字をさされ、「幹線一〇二・九キロ＝約二十六里」と云われる。

現在行なわれている五ケ瀬川の堤防工事は、大体百年に一度の洪水に耐ゆるよう構築してあるもので、余裕高が一・五米あげてあります。利根川や淀川などは工事の規模がちがい、流域の都市や耕地の状態から二百年三百年に一度の洪水に耐ゆるようにしてあります。諫早のような雨が、広範囲に一度に降った場合、五百年千年に一回という洪水の際には役にたちません。

五ケ瀬川流域は耕地が広いので県の財政に大きな影響があるが、北川、祝子川は耕地も少ないので……

云われる通り北川、祝子川、熊本市を流れる白川などの水は鉄砲水といって、いま降った雨が、すぐにそのまま出て来るので集中豪雨の場合は五ケ瀬川よりよほど被害が早

く発生します。

最も危険なのは、九州の尾根を北東にぬける台風、つまり、馬見原付近から佐伯方面に抜けるもので、五ケ瀬川の広範囲のものと、祝子川、北川の鉄砲水が一緒になることであります。

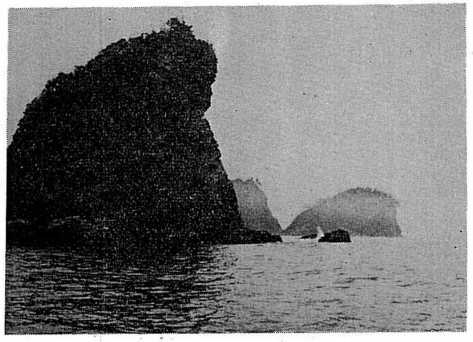
※ 熊本市白川の氾濫＝昭和28・6・25～26異常梅雨により大被害が発生、熊本県小国町では一、〇〇〇ミリの降雨量あり、熊本気象台では6・26一日間の降雨量四一二ミリを観測した。

※ 北川本流は大分県より田代川、中岳川、桑平川、市園川の水を集め、下赤に北川発電所あり。支流は日豊本線沿いの鹿川と北浦村より下塚川が流れ、北川村熊田で本流と合流し延岡港に至る。

磯釣りのまきぞえに四人が溺死

黒潮流れる日向灘沿岸には磯釣りの釣場が多い。延岡近くでも深島、島野浦の一の礁（はえ）、海士鳥礁、五丈礁、浦尻の二子礁、立礁、甫場、鱸礁、東海の磯、方財の浜、鰤見山の下、鞍掛岬、麦バエなど沢山な釣場がある

本鯛、石鯛（こりうお）、黒鯛、くちみ鯛、いがめ、ちぬ、かれいすずき、鮴等々、なかでも大物のあらなど十五キロから二十キロもあるしろものが釣れるから面白い。市役所勤務の大野さんなど寒鯛の大物（一五・七キロ、長さ九七センチ）を五丈礁で釣りあげ新聞に写真入りの記事になったこともある。



後方の島影がトマス崎

然し、これも土用波がたちはじめると大変である。二三時間以前に降ろしてもらった釣場に荒波が飛沫を打上げ舟を寄せつけない。大事な一命をしばしば亡くするのである

昭和三十四年八月二十七日、市内大瀬町一丁目甲斐釣具店の甲斐建一さんは釣天狗たち三人で小舟に乗り、大分県境に近い北浦村宮野浦の外海、トマス崎まで磯釣りに出かけた。翌二十八日早朝、事件発生の報により現場に急行した一人、伊藤計介司令補は次の如く語った。

『出勤すると消防本部は異様な空気に包まれている。前日北浦へ釣りに行った者が遭難し、すでに遭難現場と漁協の間の連絡をつけるため消防本部加藤大三郎士長は携帯無線を持参したといい、私も市の早瀬助役、山中消防長、太田団長とジープで北浦へ（葛葉経由）急行した。

事件のおこったトマス崎付近は、海底の知れぬ紺碧の海で、静かな時は油を流した如く川より静かであるが、魔の海とも称する如く、九号台風の余波をうけて何時の間にか足をすくわれる怒濤と化してしまった。件の三人はそれぞれ好きな場所に分れて釣っていたが、こんな波では迎えにも来られない。建一さんは大東亜戦争で負傷した不自由な足を踏みしめながら〃念力岩を透す〃たとえの通り人間業とも思えぬ十米位の断崖をよじ登ることに成功したのであった。他の同僚も同様別の場所で九死に一生を得て波打際に打ちあげられたが、建一さんを救助する余力はない。たまたま、その場所に宮野浦の漁夫が網を入れており、台風接近で網の破損を憂えて七、八人の漁夫が網揚げに来たのを見た建一さんは、てっきり自分を救助に来たものと早合点し、船上の人の制止もきかず、自分の泳げぬのも忘れて海中に跳びこんだのであった。網揚げ船はそれを見捨てるわけにもゆかず、近寄るうち転覆して全員海中に投げ出され、この中三人は遂に帰らぬ人となってしまった。ついに四人が溺死したのであった。

北浦村では松井村長が陣頭指揮、助役、吏員、消防団等数十人が出動し、みな、わがことのように心配し死体捜査に当ったが、延岡市消防団では長野開朔分団長以下数艘の船に団員を乗せ来たり、潜水夫五名を中心に大掛りな死体

捜査陣となった。そのうち漁夫三人の死体は収容されたが建一さんの死体は仲々見当らなかった。地元の人々もこれを最後と船を出した。その時、父親が延岡からはせつけ、これに同乗し遭難現場に向った。この父親の姿は合掌して吾が子の名を呼びつつ遺体収容の出来る事を天に祈る様子がはっきり見とれた。』（以下略）

× ×

波岡茂、市管財課長遭難捜査（38・6・10）

私の日記には、こんなに書いてある。『消防長が登庁すると間もない朝の点検前、鎌田司令補と二人が呼びつけられ「市役所管財課長波岡茂（51）が赤水の鞍掛岬に魚釣りに行ったまま行方不明になり、（私は）昨夕七時から現場まで行き、山坂越えて雨でビショビショ、服も下から着がえた。点検には出らんでよいから、加藤（大三郎士長）君と三人、捜査に行ってくれ」と命あり。八時三十分宣伝車で赤水へ。（中略）鞍掛岬は赤水の突端である。波岡氏は土曜午後三時頃一人で鞍掛岬へ行き、リュックの雨合羽が濡れてないところから、着くとすぐ落ち込んだものだろうと云う。第三鞍掛に土々呂分団旗を立て、土々呂分団（消防団）が三つに別れて捜査をはじめる。午前十一時新造船赤水丸が出、引つづき輝丸、海上自衛隊AH13等が出動し陸海から捜査す。団員75名、市役所、親族、池上鉄工所など、日高邸には捜査本部がおかれ、折小野市長、高島助役木戸議員等も見えた。午後五時三十分海上自衛隊の手旗信号「本日ノ訓練コレデ打切リ、基地ニ向フ」で、当日の捜索を止め七時帰庁。六月十二日波岡氏の死体あがる。』とある。

先年は塩浜町の某父子が日曜日？門川町ざかい付近のトビバエに磯釣りに行き、子供の目前で父親が海中に落ちこんで帰らぬ人となったこともあった。

延岡付近には高山が少ないので山の遭難はないが、磯釣りでの遭難は屢々発生する。土曜日曜のレジャーに釣りを楽しむのは健康にもよいので反対するものではないが、小舟に乗って磯釣りに行くのはどうかと思う。家人も決して喜ばないようだ。島野浦の消防団など日当数千円にもなる大漁の日が、遭難救助や死体捜査のためにはずれたり、夜中から命がけの救助に呼び起されたりし、その上、お礼の一言も云わぬ人もあるなどと、小言話をよく聞く。

磯釣りの士よ！天候に十分気をつけ、人の迷惑にならないようにしてもらいたい。

ポケット新聞社発行「リレー随筆集」にはこれに関連した太田義雄前団長の〃涙〃と題する随筆がある。

江戸時代の水害史

石川恒太郎編〃五ケ瀬水系の水害史〃より

◎有馬氏時代、慶長十九年＝元禄五年（西一六一四＝一六九二）の記録たる（国乗遺聞）によれば、洪水の状況を次の様に書いてある。

「県（あがた）地形高千穂肥後境まで十五、六里はあり、又、祝子川祝子村迄六里、又、八戸川（今の北川本流豊後境まで八里右三河の奥山大雨降りぬれば三ケ所の大川満水にて港口一ケ所に落合ける。港口の幅五・六町の処水を吐ききらずして溢れる水は浜の山南、毛なし浜と云処を打越ゆる。御城内より恒富、岡富、栗之名、浦々水たたゆる処第一なり」

これは、有馬氏が延岡城主であった時のことを書き留めた書物で延岡にはなく有馬氏が転封して行った福井県丸岡町に残っているのである。

◎牧野氏時代の記録によれば次のようである。（牧野家史による）

享保六年（西一七二一）七月三日より延岡大風雨に満水御損毛御届八月十五日差出、高一万九千六百六十八石八斗余

享保七年六月二十二日、延岡雨降続、二十三日、二十四日満水にて御損毛御届、高三万六千五百二十四石六斗余

同九年八月十四日より延岡大風雨、十六日満水に付御損毛御届、九月二十一日御差出、高一万六千七百七十石余

同十年十二月御領分御損毛御届御差出、高二万二千五百七十六石余

これは水害による被害高を幕府に届出たものである。即ち享保六年から同十年までの五ケ年間に蒙った水害の損毛高は九万五千五百三十九石四斗余となる。この五ケ年間に

享保八年を除いて毎年水害を蒙っている。その享保八年も満水こそしなかったが延岡城の土居石垣が崩れている。この被害高の程度を考えるに当時すべて石高で表わしているが石高というのはその土地の地力即ち日向と豊後、丹波で八万石であったが日向は今の東西臼杵郡と宮崎であった。丹波及び豊後の二郡を除いて日向国内の石高は約三万石であったから、この五ケ年間の水害による損毛高は、東西臼杵郡と宮崎郡との二ケ年間の生産高に当るわけである。

◎内藤氏時代、延享四年＝明治四年（西一七四七―一八七一）

内藤氏が岩城平より延岡に来るや先ず洪水に対し左の如き規定をなした（旧記書抜）

寛延元年（西一七四八）八月十日

洪水之節御手当左之通り

一、船通路留出番難致節は両御番所共代り之者出勤迄は詰切被仰付候、但詰切御賄可被下候

一、満水に而面々居住に家族共難差置節は最寄之水付無之所へ乍計前広に可引取候、但本小路桜小路辺は御本城へ

可引取候、尤於御門出役之御目付竝に御徒目付へ相届御本城へ可被通候

一、退後候有之時之ため兼而助船被仰付置候右助船之儀は御船手より御城内へ桜橋迄三艘、北小路へは元町より三艘、新小路へは柳沢町より三艘差出候筈に候間一退後の面々も有之候はば乗船引退可申候尤船御詰後此度被仰付置候

右之趣被仰出候間支配有之面々は其支配方へも可被相達候

更に宝暦元年（西一七五一）七月二十四日に左の達示をしている。

一、洪水の節御家中末々迄居宅退罷越候はば宿致候様兼而左の寺地へ申遣置候様町奉行へ以手紙申遣す

北小路、浄善提院、台雲寺、善正寺、祇園寺、新小路、光福寺、春日寺、光明寺

其の後洪水は年々あったものと思われるが手許に資料がないのは遺憾である。

洪水資料　被仰出留書より

（延享五辰年＝西一七四八）

八月十日　御用人連名

洪水之節御手当左之通

一船通路留り出番茂難致節は両御番所共ニ代り之者出勤迄は詰切被仰付候

但詰切中御賄可被下候

一満水ニ而面々居宅家族共難差置節ハ最寄之水付ニ無之取江見斗前広可引取候

但本小路桜小路辺は御本城江可引取尤於御門出役之御目付幷御徒目付江相届御本城江可被通候

一退後レ候者有之時ため兼而助船被仰付置候右助船之儀は御船手より御城内桜橋迄三艘北小路江は元町より三艘新小路江は柳沢町より三艘差出候筈ニ候間万一退後レ候面々も有之候ハバ引退可申候尤船セ話役此度被仰付置候右之趣被仰出候間支配有之面々は其支配方江も可被相達候

以上

（寛延四年＝西一七五一）

七月五日　御用人中連名

本小路桜小路

一穂鷹吉兵衛屋舗　一三松勝右衛門前

一長坂億右衛門屋敷之間一佐々三郎右衛門屋敷之角迄

一赤井喜兵衛門前より桜橋之辺迄

一加藤勘兵衛門前より三松幾右衛門脇桜馬場通り御長屋之辺迄

新小路

一篠崎安兵衛御長屋之辺　一遠山治兵衛門前四ツ辻

一三宅権左衛門屋敷前より組長屋迄

北小路

一横田善左衛門屋舗前より赤坂平太左衛門前辺迄

一太田金右衛門門前より原田小左衛門脇迄

一大橋左七後御長屋志賀弐右衛門脇迄

一台雲寺下御長屋より佐野五郎右衛門後通り右之所は満水

二八四

昨日於御用所ニ被仰渡候御書付弐通御承知可被成候且又北小路之御方最寄之寺院江茂寺社奉行中より兼而被申聞置候趣御座候混雑ニ無御座退候様御用番被申聞候

之節通船相成兼候兼而助船セ話役被仰付置段々相廻リ水付候而他江退出くれ候面々は右船より相送候筈ニ候得共或は水勢早ク又は小路狭紀所有之右之分通船不叶候面々其心得を以水高ニ不相成手廻し致引退可申候此段寄々可被申通候

洪水之節御手当

一本小路桜小路之面々満水之節御本陣江退候様被仰付候処此度御改左之通被仰付候

一御在城之節は西曲輪御門下腰掛江家族引退可申候且又大勢居重り風雨難凌節は御座敷内江も御入可被成候其節ハ御下知次第自分断を以御門出入可致候

一御在府之節は御旧屋内往来御長屋御貸被成候若右場所江も水附候品々□西曲輪江茂御入可被成是又其節ハ御下知次第可致候

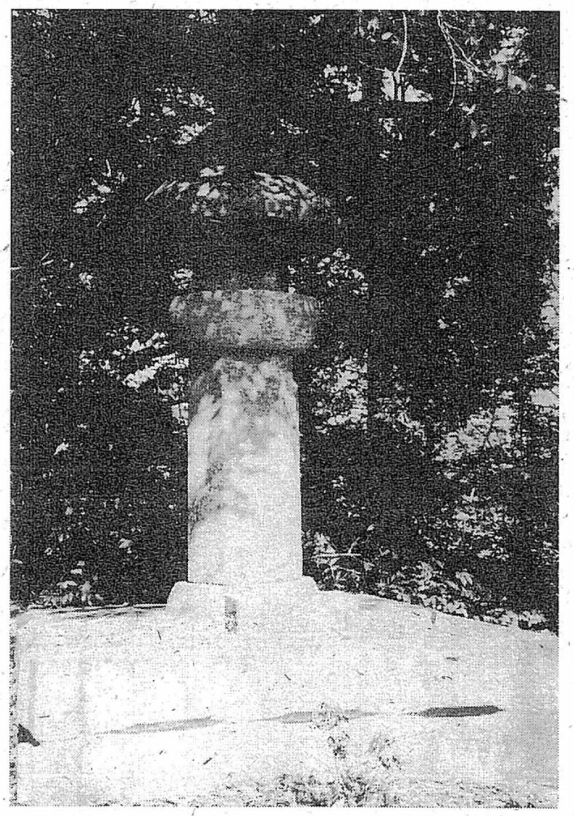
一洪水之節通船不相成場所別紙御渡ヒ成候水高ニ不相成内手廻致退可申候右之趣共被仰出候間寄々可申次支配有之面々は其支配方江茂可被申伝候

「20 周年記念誌－延岡の石塔を尋ねて（第三次）－」延岡市郷土史婦人学級ＯＢ会ひみこ（Ｈ20）

20周年記念誌

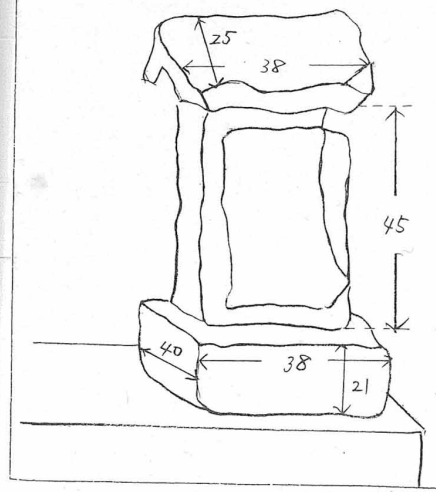
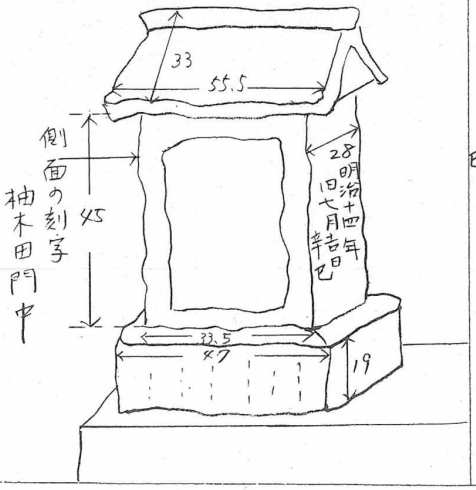
―延岡の石塔を訪ねて(第三次)―

平成20年



延岡市郷土史婦人学級OB会ひみこ

碑名	水神塔
調査日	平成16年11月13日
分類	水神塔
整理番号	159
班	
所在地	延岡市柚の木田町 東海東小学校東側道路
建立期日	年（　）月　日 不明



碑名	水神塔
調査日	平成16年11月13日
分類	水神塔
整理番号	160
班	
所在地	延岡市柚の木田町 東海東小学校東側
建立期日	明治十四年辛巳（一八八一）旧七月吉日